

紹介記事

資料

ザンビア大学獣医学部 とその周辺

大島 寛一

昭和62年12月から翌年2月まで、国際協力事業団(JICA)の短期専任家として、ザンビア大学獣医学部の学生に家畜病理学の講義と実習を行う機会が得られた。この大学には、既に多くの日本人が教育に当たっておられるし、また日本獣医師会雑誌にも紹介記事(藤本胖:日獣会誌, 41, 207-212)が出ているので、ここでは筆者の目を通して見た大学の事情を中心に述べる。

ザンビアは中央アフリカの南部、あるいはアフリカの中東部に位置し、かつて北ローデシアと呼ばれた連合王国の植民地であったが、1964年10月24日に一党共和制の独立国となった。独立以来今日までケネス D. カウンダ博士が大統領として、ヒューマニズム社会主義を標榜し信望を集めて居り、政権は安定しているが、歪も目立ち始めている。カウンダは一党の党首でもあり、軍最高指令官でもあり、ザンビア大学の学長でもあれば、また国立科学研究所の所長でもあるというように、その権力構造は我々の考え及ぶところではない。

また経済的には、独立以前より世界有数の産銅地として知られ、カッパーベルトに行くと今日もなお野天堀の鉱山が目に見える。銅の輸出により賄われていたこの国の経済は、その後世界的な銅価格の下落により衰退せざるを得なくなり、農水産業に重点を置く政策を打ち出している。

アフリカにはアラブ共和国、南アフリカ、ス

ーダンおよびケニアに、それぞれ1827年、19年、1938年および1948年に創立された獣医大がある。また、ナイジェリアには4獣医大学あり近隣諸国に獣医師を供給している。1981に国連食料農業機構はカウンダの要請に基づき南部アフリカ開発調整会議加盟国の獣医師養成を目的とする大学をザンビアに設立すること勧告した。これに対し隣国のジンバブエが反対のためカウンダもこれを了承し、1982年にジンバブエにおける設立が決定された。一方カウンダはこれでは自国の獣医師養成を満たすことは困難であるとの判断から、自国のザンビア学に獣医大学の設立を考え、その協力を日本政府に要請した。日本では1982年にJICAのプロジェクトとして、施設、設備の無償供与を行い、現在、藤本チームリーダー以下日本人スタッフ10数名による大学の教育研究に関する技術力を行っている。

ザンビアは気候風土に恵まれ、国土のほとんどが標高1,000メートル前後の平坦な熱帯疎サバンナに覆われ、未知な小生がはじめ想像していた赤土の砂漠的風景はどこにも認められない。首都ルサカでは盛夏11月には35℃を越すこともあるが、冬期6月には5-6℃になるというので、熱帯気候とはいえ空気が乾燥してり過ごし易いという。国土は水資源に恵まれアンゴラに源を発するザンベジ河はザンビア部から南部の国境を取り巻くようにしてモザビークからインド洋に注ぎ、この間人造のカバダムにより得られる電力も豊富で近隣の諸に供給されている。

このような環境の中で農業、畜産の前途は々たるものがあると誰しも考えるところであるが、実は幾多の問題を抱えている。その一つ多くの家畜伝染病である。牛肺疫、口蹄疫、フリカ豚コレラ、狂犬病などの悪性ウイルス

疾患、ハートウオータなどのリケッチャ病、パスツレラ、ブルセラ、結核、ヨーネ病などの細菌性疾患の外、ツェツェバエによるトリパノゾーマ病、ダニによるバベシアやタイレリア病などの寄生虫性疾患も多い。ツェツェバエやダニに関しては、とくにFAOのでこ入れもあって、ツェツェコントロール局が日本の家畜保健衛生所に相当するオフィスを各地域に持ち、精力的に対応はしているが、何しろ人員の不足、薬剤の不足、機動力の不足などから十分に機能しているとは言い難いものがある。

このモノの不足が第2の問題点であろう。脳軟化などの栄養、代謝性疾患もよく見かける。レストランで食べるTボーンステーキは現地の値段としては結構高価ではあるが、日本円で、1,000円前後で結構おいしい。これは口蹄疫の発生のため、肉の輸出ができないことも一因となっている。

第3の問題点としては自然環境の問題がある。気候風土に恵まれていることは先に述べたが、たとえば米作に適したような高温多湿の地帯が所々に広がってはいるものの、所詮農業を営むのは人間でありその為には人の住める環境が確保されなければならない。この地域で特に猛威を奮うマラリアの防疫、治療については、ンドラにある熱帯医学研究所などが中心となって活



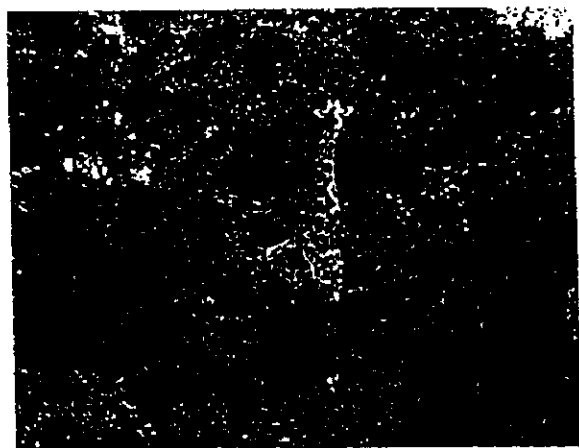
サウスルアンガ国立公園は野生動物の豊庫で、ゾウの大群を目前にすることができる。

動しているが、WHOの援助が低減されつつある今日必ずしも十分とは言えない。国民の平均寿命が男子約47歳、女子約50歳と言われ、若死が多いのはマラリアもその一因となっているようである。公式の発表はされていないが、AIDSの感染率が高いことも事実のようである。国民の衛生水準の向上が望まれる所以である。

第4の問題として、日本では一般にはあまり関心を持つことのない面かもしれないが、野生動物の存在がある。ザンビアは近代と太古が同居している国であると言われるように、都市から一步出るとそこには大自然が横たわっている。

ゾウ、水牛、キリン、シマウマ、カバ、多くの羚羊類、サルなどの草食獣をはじめ、ライオン、チータ、ハイエナ、クロコダイルなどの肉食獣および無数の鳥類、魚類に接することができ、大自然がそのまま残されている。これらの野生動物は常に家畜や農家と接触があり、これが家畜伝染病対策の大きなネックとなっていることも事実である。1962年にはルアンガ河流域に生息するカバが数百頭死亡し、その原因が炭疽病によることがザンビア大学の清水教授らにより明らかにされ、対策が立てられたことも耳新しい。

ザンビアの国土は75万平方キロ、日本の約2倍、人口は600万人、わが国の約1/2と言われ、



同国立公園のサファリでは、しばしば美しいアミメキリンの出迎えを受ける。

ザンビア大学は人口約70万の首都ルサカの一角にある。約3ヘクタールに及ぶ広大な敷地に11学部と6研究所を擁し、教員約600名、学生約3,700名である。この外ドラに工学技術関係を主とする分校があるが、これは近々独立するという話がある。

獣医学部はルサカキャンパスの東端にあり、レンガ造り2階建の立派な校舎、講堂をはじめ図書館などの付属施設や学生寮がJICAの援助により39億円を投じ、1986年に完成している。教育設備も同時に供与されたものであるが、すばらしい設備が整えられている。図書の実数は今一步といったところで、今後の充実が期待される。アカデミックスタッフは学部長以下32名で、海外青年協力隊隊員4名、それに短期専門家の教員が2-3名応援し、教育に当たっている。テクニカルスタッフ47名が実験助手や実験補助員として教育研究に参画し、また施設の整備、管理に当り、その他事務官、秘書、運転手、清掃係などを含め合計109名の職員が獣医学部で働いている。学生定員は30名であるが、実際に在学するのは各学年20名前後で、日本の大学と比べ羨ましい陣容である。

ザンビアではローデシア時代からの流れもあって、イギリス流の厳然たる横割り社会であり教授は教育、研究に専念するのみで、講義の資料や公文の作成あるいは研究成果発表のための



ザンビア大学獣医学部の正面

タイプなどは勿論秘書の仕事であり、標本の作成や実験作業はすべて実験助手の仕事であり、解剖室の後始末は実験補助員の仕事となっている。我々縦割り社会の人間では、自分で実験作業をしたり、タイプを打ったり、時には部屋の清掃をしたりすることは至極当然のことと考え、また事実能率的でもあるが、かかる行為は他人の職分を侵害することになり、我々にとっては若干の戸惑いを禁じ得ないところである。しかしそれによって、より多くの人間が職に付くことができる仕組みにもなっている訳であり、かつまた或る種の権威、権力を保つ方策ともなっているように見受けられた。

獣医学部の講座編成は、生物医科学講座(教官8名、Department of Biomedical Sciences)、基礎獣医学講座(教官8名、Department of Paraclinical Studies)、臨床講座(教官8名、Department of Clinical Studies)、および疾病予防講座(教官8名、Department of Disease Control)の4講座から成っている。疾病予防講座は大学創設の理念に基づく本大学の特徴的存在であり、臨床講座とは車の両輪としての役割を担い、伝染病の診断予防および臨床病理学的分野を担当し、基礎獣医学講座との橋渡しの性格も備えている。近い将来にはここを核とした博士課程を併設する研究所設置の構想もある。

4講座のうち日本が主として担当しているのが基礎獣医学と疾病予防の2講座であり、日本からの長期アカデミックスタッフがそれぞれ4-5名で分担している。生物医科学講座と臨床講座は連合王国特にブリティッシュカウンシル、アイルランドあるいは西独、ベルギーなど、およびザンビア側で行うことになっているが、それ程厳密な区分があるわけではない。ザンビア大学で雇用するアカデミックスタッフは給料が安く、なかなか長続きがしない恨みがある。

さらに日本側からは JOCV 隊員および短期専門家が支援している。この大学にはザンビア出身のスタッフが皆無に等しく、病理学の1名は麻布大学で、生理学の1名がアメリカのジョージア大学でそれぞれ Ph. D. を取得する為、現在留学中である。したがってこのような援助プロジェクトとしては異例のカウンターパート不在の全面支援の形とならざるを得ない困難さがある。しかし関係者の努力の甲斐があって、本年10月には第1回の卒業生13名が希望に満ちて巣立つことになっており、彼らにかける期待は大きい。

カリキュラムの詳細は省くが、大学に入学後、2年次から獣医学部に編入される。2年次には、解剖学、生理学、生化学、推計学、畜産関係科目などの基礎的科目を、3年次には、解剖学、生理学、生化学、栄養学、農場実習などを、4年次には、病理学、薬理学、微生物学、畜産学、実験室実習などを、5年次には、獣医診療、中毒学、臨床病理学、外科学、レントゲン学、臨床繁殖学、伝染病学、臨床実習などを、また6年次には獣医診療、伝染病学、臨床病理学、外科学、臨床繁殖学、獣医普及、法規、公衆衛生学、などを履修することになっており、かなり臨床を重視したカリキュラムになっている。実際にはスクールバスを利用して近郊の農場に出掛けるなどしており、直接家畜に接するのは短時間で、4時半迄には大学に帰着かなければならず、時間の無駄が多いように見受けられた。

学期は3学期に分けられ、12、1、2月が1学期、4、5、6月が2学期、8、9、10月が3学期となっており、29週を1年の授業時間としている。実際には学期とくに12月の学年初めには、学生の大学への登録手続があり、ここで1日12カッチャ(15ドル)の食費の支給を受け、全寮生活を開始することになるが、その手続に時間が掛り、1-2週間は学生の顔が揃わ

ない状況にある。また学期末では、学生が最終日の翌日から寮を締め出されるために、2-3日早めにキャンパスを去って行くような実態がある。これは航空機、汽車、バスなどの遠距離交通が毎日運行されているわけではないからであるという。

始業時間は午前8:00時、12:00時から14:00時迄が昼休みで、午後は14:00時から17:00時迄となり、17:00時にはすべての実習のあと始末をして鍵を掛け終わらなければならず、実際には16:30時には終わっていないと間に合わない。この点病理解剖実習などをしていても、どうしても表面的なものにならざるを得なかった。日本の大学のように夜19:00時を過ぎてもなお実習に余念がない?日本の学生と比べるとハンデイは大きいとも考えられたが、これはあるいは日本の状態が異常であるかも知れず、もう少し心にゆとりのあるカリキュラムの運用が必要ではないかとも思われた。一方、学生の講義、実習には十分な準備がされているようで、私の受持ったのは毎週1時間3回の病理学の講義と3時間2回の実習に参画することであったが、日本ではあまりしたことがなかったような講義の準備に時間を費やした。これは英語での講義であることもさりながら、適切な教科書が揃っていないし、また学生が購入するには余りにも高



家畜病理学組織実習風景、中央で笑っている女性は岡 JOCV 隊員で、彼女や彼等の支援が大きな力となっている。立派な実習器具も揃っている。

価値過ぎることによって、学生に渡すプリント、ハンドアウトの原稿を作り、これを秘書がステンシルにタイプし、ミスプリントを訂正したのち、秘書に渡すとプリントが出来上がるという仕組みで、1週間以上の余裕を見ておく必要がある、決して能率的とはいえなかったが、これも身の修養のためと我慢をしていた。受持った18名の4年次学生はいずれも熱心に聞いてくれたし、質問もかなり出ており、その点で私も満足することができた。

ザンビア人は一般におおらかで温順、陽気であり、むしろ反発心が乏しいようにさえ思われた。理性的というよりも、むしろ感性に富み、豊かな詩情と芸術の心に卓抜したものを持っているように思われた。このような国で何故泥棒とか強盗とかが頻発し、治安が良くないのかと不思議に思えたが、これはむしろ大都市の持つ悩みとも言えるもので、仕事のない多くの人達が首都ルサカに集り、貧しい生活を強いられる結果、富める者から頂戴せざるを得ない苦境に立たされることによるのではなかろうかと考えている。

与えられる恵はすべて頂こうというカウンダヒューマニズム政権の下で、新聞に出る大見出しの記事には、どこかの国と何々についての贈与契約が締結されたといったものが多い。アメ



子供達の表情は明るい、眼の輝はきれいだ。カルチャッシュウ（おどり）に集った部落の子供達。

リカ合衆国はすでに手を引き、国連やブリティッシュカウンシルも次第に手を引きつつあるのが現状で、2、3の訪れた研究所でも次第に空洞化が目立って来ており、今後の自国の対応が注目される。ザンビア国の経済状態の悪化が気になるが、少なくともこの獣医学部だけはそうなって欲しくない、と思う気持は関係者一同の悲願ともなっている。

コンボカセレモニー

北海道大学獣医学部附属家畜病院

(元 JICA 専門家) 安田 準

日本の約2倍の広い国土を持つザンビアの西のはずれ、首都ルサカから600km離れたところがロジ族の故郷西部州 (Western Province) で、アフリカの大河のひとつザンベジ河が怒々と流れています。毎年雨期の12月から翌年3月にかけて川幅は約50kmに及び、さながら湖と化します。ロジ族の王宮はこのザンベジ河の中州にあり (Lealui), 川の水量が増してくると周囲の生活環境が悪化してくるので、河岸の乾燥した土地 (Limulunga) に人々は移動します。この水から逃れて乾燥地に移ることがロジ語のコンボカ (Kuomboka) の意味だそうです。

通信・交通・宿泊など人や物資の移動に関するあらゆる社会的基盤が未発達なザンビアですから、旅行者がおいそれとこの儀式を見に行くことはできません。第1の問題点として、いつこの儀式は行われるのか。ザンベジ河の水量により決まるようです。今年は3月30日に行われました。昨年は水量があまり増えなかったので取りやめになりました。儀式挙行の日が決まってもマスコミが未発達で、口コミの世界ですから一般の人、特に外国人に情報が事前にもたらされることは稀です。第2の問題点として、交通手段をどうするか。数年前までは一応国内航空が西部州の州都モンゴまで飛んでいたそうです。現在では600km離れた土地に行くのに陸上交通しかありません。しかもガソリンスタンドのある集落は途中にわずか2ヶ所のみ。それも果たして営業しているのかどうか。ルサカではガソリンスタンドで並んでいても、すぐ前の車のガソリンを入れ終わったところで、品切れということをししばし経験しており、ザンビアのガソリン事情は信用できません。また途中でドライブインなどある

うはずありません。第3の問題点は宿泊です。モンゴにはホテルが2軒しかなく、当然早い者勝ちです。このように日本なら観光業者がこぞってツアーを組む様なイベントも、ザンビアでは地元の人以外は一部の限られた人しか見ることができないのです。私がこの祭りに行けたのは非常に幸運としか言いようがありません。祭りの正確な情報は現地在住の青年海外協力隊員 (JOCV) の連絡網から得ることができました。さらにまたモンゴの小学校で先生をしている独身の JOCV 女性隊員の家に厚かましくも泊めてもらうことにしました。予備に20Lのガソリンタンクを持ち、缶詰とビール、クラッカーなどの食料品を確保して、出発準備は整いました。現地に着してから幸運は重なり、テレビ映像の専門家として職業訓練プロジェクトでザンビアに来ている日本人チームに会い、彼らが撮影用にチャーターした船にもぐり込むことができました。



写真2：右はロジ族の王様Yeta四世、左は来賓のザンビア共和国首相M. Masheke氏



写真1：チャーターした船で、コンボカセレモニーの出発地Lealuiへ向かう



写真3：Nalikulwanda (船) の中央部にはシンボルの張り子のゾウが

午前6時前、まだ暗いうちに船外機付きの小舟に乗り込み、水草の繁るザンベジ河の氾濫原を行くこと約1時間、ようやく宮殿のある Lealui に到着しました(写真1)。しかしながら王宮の中で行われている儀式を見ることはできません。時折ドラムの音が聞こえますが、何をしているのかさっぱり分かりません。いい加減待ちくたびれて来た頃やっと王様の行列が現れました。ドラムやヒョウタンを共鳴器としたマリンバの様な楽器を先頭に、お付きの人々は手に手に、カパンだの、傘だの、帽子だのと王様の身の回りの品々を持って、船着き場まで行進します(写真2)。王様の乗る船は玉座の上に張り子のゾウを載せた大きなもの(Nalikulanda)で、数十人の漕ぎ手と楽隊も乗り込みます。漕ぎ手の人々はレオパードの革を腰からぶらさげ、赤い帽子を被っています。全員の息が合ったところで船出となって、これから6時間かけて約40km離れた Limulunga までザンベジ河を漕ぎ進んでゆくのです(写真3)。

一方 Limulunga の船着き場では御婦人方は民族衣装を身にまとい、腰にはチテングという布を巻き、歌ったり踊ったりしながら船の到着を待っています(写真4)。予定では午後3時に船は到着するはずなのに、一向に船陰は見えません。午後5時、強い西日に照らされ逆光の



写真4：鮮やかな色彩の民族衣裳

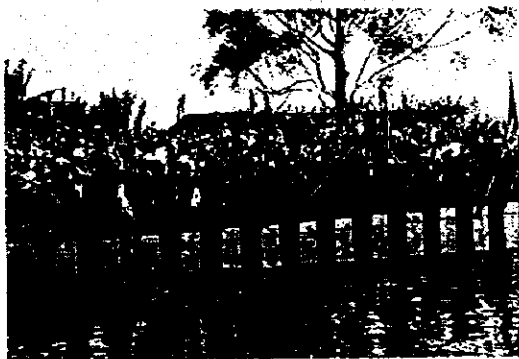


写真5：漕ぎ手はロジ族の名譽にかけて懸命に漕ぐ



写真6：夕闇がせまり、祭りは最高潮に達する。ドラムの音が一晩中鳴り響く

中、先導のカヌーに続いてゾウのシルエットがだんだん大きくなってきました。船は直ちには着岸せず、船着き場を取りまく様にして待っている群衆の中を何度か旋回した後ようやく着岸しました。人々は口々に何やら叫びながら総立ちとなり、祭りはクライマックスを迎えました(写真5)。正装した王様が上陸し、今度は Limulunga の王宮前でドラムと笛による繰り返しの多いリズムに合わせて激しい踊りが夜通し続きます(写真6)。ザンビアの現実を見ると、人々の生活はインフレと物資不足で破綻寸前です。そんな物質的なことは民族の長い歴史の上ではたいしたことないのだと言わんばかりに、民族のエネルギーを音楽と踊りで表わした強烈な印象が今も鮮明に残っています。

平成3年2月25日から5月25日まで、国際協力事業団の短期派遣専門家として、ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトに参画し、獣医臨床生化学の指導のためザンビア共和国に滞在しました。

ザンビアにおける衛生事情と対策

国立環境研究所環境健康部 鈴木 明

相手国の政情については、もうすでに十分な情報をもっていることと思いますので、健康を守るためのお話を私の経験(体験)から順次述べさせて頂きたいと思えます。

1) 病気と予防注射について

旅行経験者あるいは調査体験者は、忙しいためかそれとも常識になっているためか必要最低限の事しか教えてくれませんので、ご自分で経験者に連絡して確認をしながら準備を進めて頂きたいと思えます。特に、予防注射(黄熱病のイエローカードを持っていないと入国できません。)は、現地ではできないと考えたほうがよいようです。現在のところ、WHOの報告とは関係なく、コレラ、狂犬病(イヌ、ウシに多発しています)、破傷風、結核等がはやっています。また、マラリアは現地のかかりの人がかかっており、日本人スタッフもかなりの方が経験しているようです。その他として、A型、B型肝炎等に注意が必要です。輸血にはくれぐれも気を付けて下さい。それでは、どうしたら良いかということですが、誰も的確に教えることができませんので、予防接種関係は、最寄りの検疫所に問い合わせ、確認しながら予防接種を受けて頂くことがよいと思えます。

2) 特にマラリアについて

何処に行っても、「気を付けなさい」と言われましたが、日本では具体的にその防止策について何等の情報も得ることはできませんでした。現地に行って初めてその感染者の多いのに驚きました。もっとも、現地では、病気の内に入らないのかも知れません。私どもの滞在中だけでも、JOCV(海外青年協力隊員)の2名と専門家の奥様が軽度のマラリアにかかりました。また、私が受け持った学生が1名マラリアにかかり、授業中に高熱を出し震える手で授業出席証明書のサインを求めてきたことがありました。そして、帰国後、JOCVの女性隊員が不幸にもマラリアで亡くなったと言うことです。「アフリカ土産にどうぞ!」と言う人もいますが、出来ればかからない事にこしたことはないと思えます。そこで、対策を考えてみますと、

(1) 蚊取り線香は、十分もって行くこと、1日当り1-2本以上使う予定で用意されたら良いかと考えます。また、同等の製品(リキッド類の殺虫剤)も有効かと考えられますが、停電が頻繁に起こることを考慮する必要があります。また、現地でも手にはいると聞いていましたが、中国製の質の悪いものは効果に疑問があり推奨できません。安全性からいうとフタ付きの蚊取り線香がよいかと思えます。

(2) スプレー式殺虫剤は1-2本用意された方がよいでしょう。宿泊する施設によってその必要度は異なりますが、ホテル等に泊まる場合には、帰宅後、ベットの下のカーテンの裏、風呂場そして洗面所などを噴霧すると良いでしょう。蚊の絶好の隠れ場所だそうす。特に、ルサカを離れた所では有効だそうす。

(3) 昆虫の忌避剤もできたら1-2本用意されたら良いでしょう。動物を見るためにサファリに行かれると思いますが、そこには、蚊の他に「眠り病」で有名なツェツエバエがいるので、忌避剤が短時間なら効くようです。

3) その他の準備について

上述した3点は、季節物ですから冬から春にかけて入手するのは困難なことがあります。私の場合、日本の真冬の出発でしたので蚊取り線香を買い求めるのに苦労しました。それ以来、我家に多少のストックを置くようにしております。出かける予定のある方は早めに用意された方がよいと思えます。ここで、季節について考えてみますと、服装の問題があります。何しろ、ザンビアと日本は、季節的には完全に逆ですので、行きと帰りの着替えなどを考えて準備されると良いでしょう。また、公式、準公式な挨拶などが必要な場合もありますので、ネクタイ1本とYシャツを持って行くことも考えたほうが良いかも知れません。気温差、時差、高度差のため疲れが出ますので風邪などひかれないように気を付けて下さい。ちなみに、私どもが得た情報では、ザンビアは赤道の近く(南緯6-15度)にありますが、首都ルサカは標高1200-1400mにあるため涼しく、冬には、電気ストーブ(日本人の感覚で現地の人はもっと寒く感じているようです。)が必要だそうす。しかし、ルサカを離れサファリ

や調査、そしてリビングストンのビクトリアの滝見物に行くと、標高が400-600mに下がるため気温はかなり暑くなるようです。私がいた夏では、ルサカで暑すぎると感じた日は少なく、快適にさえ感じられました。しかし、サウスルアンガの国立公園では30-38度の熱風が吹き、汗が出る前に塩が吹き出してきました。ですから、着替えは、少し多めに多種類持って行かれることをお勧めします。

4) 持っていくと便利な薬について

マラリアの予防や治療薬(クロロキン、バルドリン等)は、日本ではほとんど手に入りませんので、現地の大都市の薬局で買うしかありません。クロロキンは、日本で発売中止になったように、副作用も強い(腹の調子が悪くなる等)ので体調にくれぐれも留意して下さい。日本あるいは現地の専門家や医師と良くご相談の上使用されたらよいと思います。

その他の薬としては、次のような薬をお持ちになったら良いと思います。

(1) 抗生物質2種類以上: 胃腸系疾患、外傷、風邪の対策として、日本人社会を除くと現地にはこれらの薬はほとんどありません。たまたま、私の滞在中にコレラが発生し、毎日、新聞で何人死んだとの報道があり、コレラ警報が連日出されていましたが、実際には、その何倍か

の乳幼児、子供を中心とした人々が死んだ様です。

(2) 総合ビタミン剤: A, B, C, E, B₁₂, etc, 時差高度差等によりストレスが非常に貯り易く、神経過敏になる事がありますので、滞在中は、必要に応じて服用されたら良いかと思えます。また、現地の生野菜を食べるとは困難なことが多いので、ビタミンCの錠剤を持っていけたら良いかと思えます。

(3) その他: 整腸剤、下痢どめ、正露丸(とっても役にたちます)、かぜ薬、外傷剤(特に、破傷風が有りますので、オキシドール、イソジン等)、歯医者さんを見つけたことはありませんので、歯の鎮痛剤、虫刺され薬等、また、私の場合、アフリカを旅行したことのある友達(医者)から、精神安定剤を持って行くことを勧められ持って行ったところ、役にたちました。

(4) 薬とは言えませんが、体のイオン調整にポカリの粉末、栄養のバランスを取るために、カロリーメイト等が役にたつかも知れませんが(高熱を出した時や、脱水症状をおこした時に役にたちます)。

上述した薬を使わないにこしたことはありませんが、ルサカを離れた時のことも考えていた方がよいと思えます(ルサカには、日本人が多くたいいの薬を分けてもらうことができますが、一歩でも地方に出ると自分で対応するしかありません)。いずれにしても、発熱が怖いので、体温計は必需品です。

ザンビアのマラリアに関しては以下のような小冊子が本稿の執筆者を通して総括班に送られてきております。これは JICA の長期専門家、チームリーダーとしてザンビアに派遣され、ザンビア大学獣医学部基礎獣医学講座教授として勤められた堤 可厚氏の手になるもので、ザンビアのマラリアについて詳細に書かれており、その対策についてもふれられています。関心のある方は総括班までお問い合わせ下さい。

(総括班)

記

堤 可厚 「ザンビアのマラリアと蚊: 蚊に刺されないための知恵と工夫」ザンビア日本人会、1990年3月、25p。

アフリカの思い出……バオバブ序説

昭和23年 佐藤 隆 平

北大 若広畜産大と四十年の大学勤務を定年退職後、北大獣医学部同窓が主体となつてすすめている国際協力事業団のサントピア獣医学部技術協力プロジェクトに参加、獣医学部教授を昨年まで三年余り勤めた。この間に、アフリカの人とその社会にも勿論興味を持ったが、彼の地の自然には殊に心がうはわれた。狭い大地の割れ目にサンベジ川の膨大な量の水が溢れ込むウイクトリアアフォールの巨大な眺めは言うに及ばず、中尾 享先近こ夫妻とサファリを楽しんだりして計四回も訪れたケニアで目にしたグレートリフトバレー（大地溝帯）の圧倒的な自然のたまたまには大いに好奇心をそそられた。野生動物なども含めて、帰国後に残響いて勉強してみたいことが沢山あった。しかしすべてはこれから言うところである。これら関心項目のひとつにアフリカを象徴する樹木のバオバブ Baobab が

ある。本持社任の前年の昭和六十二年に、私が短期派遣専門家として前記獣医学部で教えた時、同僚が首都ルサカから車で四時間程のカリバダム（南部國境）見物に連れて行っ

るとはれることもある。バオバブは海拔千メートル前後より低い乾燥サバンナ地帯に生育するので、首都などの大きな都市がそれより高い高地に存在している東南アフリカでは海岸や低い地域に行かないとこの木は見ることが出来ない。サントピアでも雨の多い高地には分布していない。バオバブは光沢のある灰色のこつこつした木肌（象の皮膚）をしていて、その奇妙な樹形によって珍らしがられる。前述の様に根が上にある様に見えることに加えて、幹は太くすんぐりした感じである。写真（1）にその一例を示している（比較のため家畜が側に立っている）。この写真の様に幹が円筒形のもの、ダルマの様にぶくらんでいるもの、樹高が割合高くすなりとしたもの、木肌に深い溝が何本もあり、あたかも何本もの木がより集まって幹をつくっている様なものも



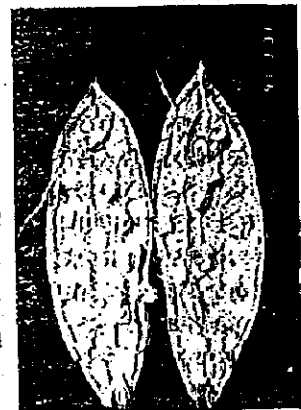
トザンビアのバオバブ

て見られた。その途中、路傍を指してこれがバオバブと教えられた。樹々の間に灰色の大きな岩塊と見まがう様な木の幹が並んだ。これがバオバブとの初対面であった。その後、ガイドブックや旅行記にも、この木はアフリカ固有で、その奇妙な樹形によりアフリカの景観を代表するものとして紹介されていることを知った。帰国後少ししてアフリカの自然についての放談を時々みているが、南部アフリカや東アフリカのものにはよくこの木が写されている。また写真集などにも載っているのでも、ご存知の方も多いかと思ふ。

ここでは、ケニアのナイロビや隣国のジンバブエのハラレなどの本屋で入手した数冊の本を参照して、この樹木のプロフィールを紹介したい。樹高は余りなく、せいぜい二十五メートルまでであるが、その幹の太さは世界でも最も大きいとされる。また、北アメリカのセコヤに似て長い樹齢を持っていて、世界の珍奇な木のひとつとされている。五米程では五十年で、中には四千年のものもあると記されている。仏人マイケル・アタンソンが十七五四年にアフリカの西岸セネガルで、世界のどこにも見られない太い幹の木を見たこと初めて記録した。バオバブの語はスワヒリ語由来らしい。この木は、異様な姿であるが、根が上にある様に見えるので、逆さ木と呼ばれ、また逆さに植えられたニンジンとも表現されている。さらに、ポルトガル

ある。ある本の写真では南部アフリカのボツワナでは短い幹が一度、盆栽の様にねじ曲がり、枝の先が地面に届く位に垂れ下がったものもある。風のせいでしょうか。この様に、環境により変化のある樹形がみられる。

幹の周囲の長さは一アフリカ最大のはキリマンジャロ南東斜面にある二十八米のもの



バオバブの乾燥した果の断面

であった。しかし、南アには三十三・四米のものがあると言ふ。幹の径は年に五・七センチ成長とされるが、私がサントピアで見たのは多分数百年以上と推定される。樹齢は放射性測定からも裏づけられている。北米のセコヤは樹齢三千年以上で、高さは百メートルに及ぶし、シゴクウツなどは六十メートルのものもあるらしい。屋久島の縄文杉には七千年以上のもあると言われるが、樹高がさうとうと二十数メートルで、樹形はバオバブの古いものに似ている様に見える。バオバブは落葉樹で乾期九月には葉が落ちていない。白い

大きな花が短期間咲くが、果実は長い柄がついていて、乾燥してもかなり長い間開き下がっている。表面に産毛のある濃褐色の硬い殻（長さ二十センチメートル）で、内部には黒い種を含む褐色の皮に富む果肉が入っている。写真①に剖面を示している。

サントピアではバオバブの生育する地域に行くとき、彼等には必ず何本かのバオバブが赤い土の上に守護神の様に立っている。森林サバントピアの中にひとまわ自立して立っている。この木は長い間アフリカの人々の崇拜をうけて大事にされてきた。その理由のひとつは信仰の対象であるため、もうひとつはこの木には多様な用途があるからである。大まかに言うと、木の皮が繊維、ロープ、衣類、バスケットやマラリヤの薬に、木材はカヌー、石炭、ニカワ、ゴムなどに薬は野菜代わりにスープやつけ合わせに、また熟をまじり、果肉は酒石酸をふくむ美味で、ビタミンCに富み、飲みものや調味料、下薬薬に、種はヒータツ代りにたべる。また、寿命の長い木には大きな空洞が出来ていて、しばしば隠れ家に使われる。勿論、種も野生物や牛などの家畜にも好物である。よく知られているのは、バオバブの木は繊維質で海綿状で比較的柔らかく多量の水分を含んでいる。特に旱魃時には象は牙で穴をあけ、その水を利用する。それ故、象のため被害をうけて枯れるバオバブも多い。

アフリカにのみならず、奴隷貿易からんで、キューバ、シマイカ、アントリコ、アンティグアなどカリブ地域へ、また、ブラジル、アメリカへも運んだと言う。これはバオバブの種を人がたべる習慣と関連している。アフリカではバオバブは多く交易のための道路や村邊に沿って分布している。動物のほかに人の移動により拡散したと言われる。

アフリカ以外の地域ではバオバブはどの様に分布しているのだろうか。サントピアでの任期中にマダガスカルからさらに東へ離れてインド洋に在るモーリシャスに休暇で出かけた。そこは火山島でアフリカとは地上のつながりはない。そのバンブルームスの植物園で、アフリカから移植された *A. digitata* の木をみた。また首都のポートルイスの博物館の前庭にもあった。モーリシャス滞在中に本屋に立ち寄ったが、サントピアと異なりヨーロッパその他の沢山の本があった。ひとこと見ると楽しいカラー写真の本の表紙に、気に入っていたバオバブの木が出ていた。マダガスカル島の自然に関するものであった。似た様な一冊を買って、むきほる様に読めた（残念ながらフランス語の本）。バオバブはマダガスカルの代表的な種生として紹介されていた。アフリカのと同じ種類と共にマダガスカル特有の *A. grandidieri* の名も見られた。この種類は多分二十センチはあり長寿にすなりと書かれている。

以上の様な有用性に加えて、その異様な形とどろしどろした木は殊に見られる姿容及び長い寿命によって信仰の対象となるにちかわない。アフリカでは多くの木は崇拜されている。乾燥サバントピアにおいて自立することから、その土地の征服者、統治者の象徴ともされ、先祖の魂が宿るものとまつられる。多産の神として女性の名で呼ばれることもある。また、種をひいた粉から祭祀の祝い料理がつくられる。空洞は巫術師などの靈魂のため埋葬室につかわれる。（西アフリカ）

さて、バオバブはバオバブ科 (*Bombacaceae*) に分類され、最初の記載者の名から属名は *Adansonia* である。アフリカ固有の木とされるが、アフリカに見られるものは *A. digitata* 一種である。アフリカ大陸の東にあるマダガスカル島は太古アフリカ大陸から離れたものであるが、バオバブはこの島で進化をとげ、現在は七種がある。すなわち、アフリカ大陸と共通の *A. digitata* のほかに *A. grandidieri* などの計七種である。アフリカ大陸にはマダガスカルが大陸から離れた時にすでに、大陸に現存する種類が残されていたものか、何時の時代かはこの島から大陸に移ったものかは私にはわからない。果実は堅く丈夫なことから海がはこぶ可能性もあろう。この他、オーストラリアには *A. gregorii* がある。人類が航海によりインド洋など海洋にのり出すと共に、バオバブはインド、ジャワ、

以上がこれまでに得られたバオバブの知識である。一体バオバブはどの様な特徴によって分類されているのか私にはわからない。オーストラリアから家畜が牧場だという娘さんが獣医学部に教官で来ていたが、彼女によると、バオバブはオーストラリアではポトルツリーとよばれるとか。インドや東南アジアの国々やカリブ海地域で、またブラジルとかアメリカではどんな種類のバオバブが分布しているのかの知識もない。何時の日かマダガスカルやそんな所で実物を見たいものである。また、バオバブについて、国内その他の資料をもっとみたいと思っている。金田博士の講義をいただければ幸いである。（平成四年十一月）

ザンビア便り

JICA 専門家 在ザンビア

小林好作(33歳)

エルム新聞383および384号お送りいただき、ありがとうございます。ジヤマイカに器配され、それからこちらにまわってきたので、ちょうど一カ月の旅をしてきたことになりました。JICAをJAMICAと読みちがえたのでしょうか。

日本にいてもそうですが、まず読むのが「談話室」です。私も一、二度おじやましたことがあるので、雰囲気は伝わってきます。祭歌祭の記事もわくわくさせてくれました。祭歌集をもってくればよかったとくやんでいます。人家がまばらなので、あたりをはばかることなく、ときどき嗩笛をはりあげ、フラストレーションを解消しています。しかし一月のいまもふつうは22-24℃、この三、四日は25-28℃にもなっ

て暑いくらいですから、北の大地の歌はちょっとちぐはぐ、やはりしばれる響の夜更けに酔っ払って歌うのが最高ですね。

ソマリア、アンゴラ、それに隣国のモザンビークとちがって、ザンビアは平和です。多民族(部族)国家ではありますが、民族間対立は今のところなく、他のアフリカ諸国を通過してきた人々に言わせると、こんないい国はないそうです。この国の現在の困難は経済です。銅を主とする鉱物資源の輸出に依存してきた国家財政が、銅の世界市場価格の落ちこみで破綻してしまつたのです。他に雇用を受け入れる産業がないため失業者の増大とインフレが進行中です。仕事をもちない成年男子が山ほどいます。幸い職についていても、月給は二

万、三万クワツチヤ(邦貨七千二百、一万円)です。これではとてもまともな生活はできません。南阿連邦との関係が改善され、ここから輸入された生活物資が市場に出回っていますが、これらを買えるのは外国人と一部の上層階級の人々だけで、一般労働者には高額の花です。それでいてなんとか生活していけるのは、この地の温暖な気候と、多少なりとも存在する社会保障制度(住宅、失業保険、医療、教育)のためであらうと思われまふ。また雨季(日本の梅雨とおおちがいでさわやかこのうえなし)に入つた十一月からは、家族総出で空き地を耕し、トウモロコシをはじめ、さまざまな作物を作っています。これが食料難を解消する手段になっています。街の中心部をはずればいたるところにマンゴー、パイヤなどの樹があつて果物を提供してくれています。そのためか、生活の苦しさにもかかわらず、人々のはんびりして、乏しきを分ちあつていまふ。ここえきてまだ三カ月ですが、最先のつかえそうな、寒い日本のわが家へは帰りたくなくなつている今日此頃です。

家畜放牧の広がりがもたらすもの

●アフリカ・ザンビアの野生動物と家畜の関係

国立環境研究所環境健康部

鈴木 明

360度どちらを向いても地平線が見え、地平線のさらに上方に気圧がゆれている。山だろうか、丘だろうか、しかし、地図上でそれらを確認できない。「ないものを見ているのだろうか。いや、そんなはずはない、向こうに何かあるはずだ」と自問自答していた。

そのときであった。「右30度に何かいる」と、現地のガイドがニャンジャ語なまりの英語で叫んだ。私には何も見えないが、4輪駆動の調査車はその方向に走り出した。動物がこちらを警戒するぎりぎりの所まで近づいていた。車が止まると同時に、望遠カメラのシャッターの連続音がし、VTRの撮影が始まり、動物名、頭数、場所等が細かく記録されていった。そこにいたのはザンビアのカフェ・台地

にだけ生息する国際保護動物のカフェ・レーチエ（大型のシカ）で、いつの間にか数百頭の群れが前方一面に広がっていた。

ここは、ザンビアのほぼ中央にあるブルー・ラグーン国立公園の真ん中である。気温42℃、湿度86%の世界である。振り返ってみると、日本を離れて4日目、ロンドンを経由して飛行機で48時間、そして、首都ルサカから西方に約300km、調査用ジープで約6時間の所である。私は、1990年から92年にかけて、ザンビア大獣医学部とザンビアの国立公園で前述のような共同研究をすることができたので、その概要について紹介しようと思う。

● 調査のきっかけ

私は、1989年12月から90年3月

まで、ザンビア大獣医学部で、環境衛生学の講義、実習、研究指導を行った。その際、大学の教員と、国立公園とそれに隣接する放牧地を訪れた。いま、考えると、このときの調査が後の共同研究につながる第一共同調査といえる。そのとき、家畜と野生動物との接触によって、ヒト・家畜・野生動物間の共通伝染病の感染が懸念され、実際、人畜共通伝染病で死んだ人間がいることに、われわれは大きなショックを受けた。しかし、その実態は不明で、共同研究が必要であることを認識した。

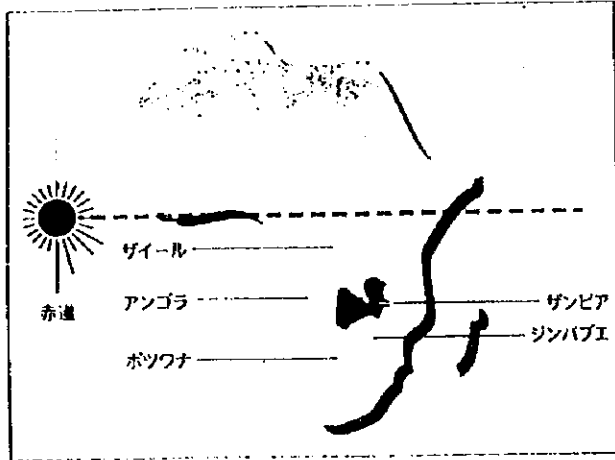
次の年の91年度に、文部省科研費・国際学術の補助を受け、ザンビア大獣医学部と共同で、「発展途上国における家畜放牧の広域化が野生動物に及ぼす影響について」

カフェ・レーチエの群れ(後方)



牛の群れ(手前)

▲家畜(牛)と野生動物(カフェ・レーチエ)が混在している



◀ザンビア共和国の位置

総合的な第三次共同調査研究が遂行された。翌年の92年、アフリカ南部は50~60年ぶりの大干ばつに襲われ、深刻な食糧危機に直面した。そのため、野生動物を捕獲し食糧にすることを認めた政府もあった。この大干ばつの家畜と野生動物への影響を探索するために第三次共同調査が実施された。

● ザンビア共和国

まず、ザンビア国について簡単に紹介しよう。旧名は北ローデシアで、1964年10月、英国から独立し、ザンビア共和国が誕生した。面積は日本の2倍、人口は日本の約19分の1(約620万)である。マラリア、ねむり病などの風土病やコレラや結核等の伝染病で死ぬ人が多い。国土は、ザイール、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ボツワナ、ナミビア、アンゴラの8カ国に囲まれた内陸部にある。また、緯度的には、熱帯に属するが、国土の大部分が300~1,500mのなだらかな台地にあるため、ザンビアといえることができる。国の経済を支えているのは銅等の鉱山資源である。政府は、

人口増加による食糧増産のため、ザンベジ川の本、支流流域に広がる肥沃な土地を利用した畜産に力を入れており、約200万頭の牛が飼育されている。

● 家畜-野生動物の関係と伝染病

3度にわたる調査の結果、牛と野生動物は水と草を求めて川辺や水辺に集まるため、接触の機会が多いことと、生息の共有域を持つことが確認された。そして、その接触は乾季に高くなることが判明した。一方、同地域で、共通伝染病を媒介する多種類のグニが採取され、人・畜・野生動物の共同伝染病が血清学的に確認された。92年の大干ばつは、草地面積と水辺を減少させ、牛と野生動物の接触度を増やす一方、体力を消耗させ病死動物を増やした。カフェ台地内の村落で約3,000頭の牛が病死したそうで、全頭数の約40%が失われたそうである。この数字をすべて信用できないが、われわれが調査したブルー・ラグーンとロッキンバー国立公園内で、牛、シマウマそしてカフェ・レーチェの多

数の死体を発見した。同行した病理学者によると、ほとんどは病死によるもので、牛と野生動物の死因は同一の伝染病である可能性が高いとのことであった。

これらの結果は、現在の家畜の管理形態が共通伝染病を蔓延させ、野生動物の減少や食肉生産の低下を引き起こし、人の飢餓をもたらす可能性が高いことを示している。

多くの開発途上国では、人口が急増し、その食糧を確保するため広大な森林地帯が耕地や放牧地帯に変容しつつある。ザンビアでも例外ではなく、放牧地帯が広域化し野生動物区域の近辺まで接近している。現地調査で野生動物と家畜の接触と混在が確認された。また、一旦野生動物に移った伝染病は、そのコントロールが非常に難しいため、動物種の保存を危うくするだけでなく、畜産へ大きな損害を与えることが、本調査研究で示された。

● おわりに

本調査研究はザンビア共和国を対象にしているが、食糧増産のための放牧地の拡大は、アフリカのほかの諸国やラテンアメリカ等の多くの開発途上国においてみられる現象といっても過言ではない。したがって、本研究の成果は、多くの国々に当てはまる基礎的資料を提供するものと期待される。また、このような研究は、人口問題、食糧問題、野生動物の保護の問題などを含む地球規模の環境問題を解決するための糸口になると考える。

平成6年度誌上発表

年記号	発表者	題 目	掲載誌	巻(号)	ページ	刊年
E- 4	M.M.Lipsky(*), B.A.Fowler(*1) (*1Univ.Maryland) 青木康展,松本理	cells exposed to semiconductor materials PCBによる特異的遺伝子発現	グローバルネット	(42)	28-29	1994
E- 5	Y.Aoki,M.Matsunoto, K.Tanno, I.Hatayama(*1) (*1Aomori Pref.Inst.)	Induction of glutathione S-transferase II in mouse liver parenchymal cells by 3453' 4' -pentachlorobiphenyl-comparison between C57BL strain and DBA strain	Jpn.J.Toxicol. Environ.Health.	4 1	33	1995
E- 6	青木功喜(*1), 佐々木一之(*2), 加賀谷強(*3), 小野雅司, 加藤信世(*4) (*1青木眼科, *2金沢医科大学, *3新羅津村, *4東京女子医大)	北海道における高齢者の視覚の疫学調査	高齢者問題研究	(10)	59-70	1994
E- 7	佐々木一之(*1), 小野雅司, 青木功喜(*2), 加藤信世(*3), 森根優(*4), 中泉裕子(*1), 藤沢米人(*1), 小島正英(*1), 坂本保夫(*1), 柴田野孝(*1) (*1金沢医科大学, *2青木眼科, *3東京女子医大, *4聖宜原病院)	生活環境の異なる三地域に在住する住民を対象とした白内障の疫学調査—第1報 有所見率、病型を中心として—	日本眼科学会雑誌	9 9(2)	204-211	1995
E- 8	M.Kunimoto	Methylmercury induces apoptosis of rat cerebellar neurons in primary culture	Biochem.Biophys.Res. Commun.	2 0 4	310-317	1994
E- 9	阪本学	培養神経細胞を用いた化学物質の毒性評価	グローバルネット	(39)	22-23	1994
E- 10	M.Kunimoto	Possible involvement of the 440 kDa isoform of ankyrinB in neuritogenesis in human neuroblastoma NB-1 cells	FEBS Letters	3 5 7	217-230	1995
E- 11	M.Kunimoto	440 kDa isoform of brain ankyrin as a sensitive marker for the neurotoxicity of methylmercury	Jpn.J.Toxicol. Environ.Health	4 1	39	1995
E- 12	小林隆弘,持立克身, 梅津豊司(*1), 水谷太郎(*2), 谷川貞光(*3), 宮崎良文(*3), 大平辰明(*3), 福島純一(*3) (*1地域ク,*2筑波大, *3森林総合研)	植物由来の生理・生物活性及び検索法に関する基礎研究	平成5年度科学技術庁 委託調査研究成果報告書 自然生態からの有用資源開発手法に関する総合的研究(203p.)		18-40	1994
E- 13	T.Mizutani(*1), T.Kobayashi, H.Tanaka(*1), H.Naito(*1) (*1Tsukuba Univ.)	Significance of thromboxane A ₂ in NaOCl-induced airway hyperresponsiveness in guinea pigs	Inhal.Toxicol.	6	139-149	1994
E- 14	小林隆弘	気道反応性	地域における大気汚染 による健康被害の予防 システムのあり方に関 する研究(大気汚染研 究協会,122p.)		93-108	1994
E- 15	小林隆弘	大気汚染と鼻アレルギー	アレルギー炎症性疾患 (黒沢元博・宮地良樹編 著,先端医学社,577p.)		546-556	1994
E- 16	鈴木明	家畜放牧の広がりをもたらすもの—アフリカ ・ザンビアの野生動物と家畜の関係—	グローバルネット	(47)	22-23	1994
E- 17	G.S.Pandey(*1), A.Mweene(*1), A.Suzuki, A.Nambota(*1), T.Kagi(*1) (*1Univ.Zambia)	Dermatophilosis (cutaneous streptothricosis) in kafue leche (kobus leche kafuensis)	J.Wildlife Disease	3 0(4)	586-588	1994
E- 18	村上正孝(*1), 田村憲治(*1筑波大)	小地域における疾病創造の解明にかかわる一 考察	生存科学	5	291-307	1994
E- 19	田村憲治,小野雅司, 村上正孝(*1), 高橋秀人(*1), 西邊地利己(*2), 山宮榮奈子(*3), 新井峻(*4) (*1筑波大,	国保備病統計データによるアレルギー性鼻炎 受療率の経年変動と地理的分布	日本公衛誌	4 2(3)	194-202	1995

【このレコードは次ページに続きます。】

【国際交流】

ザンビアの若き獣医学徒 Michael NGOMA 君の死を悼む

佐藤 儀平

株式会社北海道ラジオアイソトープセンター
わが友 NGOMA 君が、1993年10月9日早朝（現地時間）、ザンビア国 LUSAKA 市の大学病院で急逝した。33歳であった。彼はザンビア大学（UNZA）獣医学部の講師で、JICA の UNZA 獣医学部技術協力計画による研修留学生として、1991年4月に来日し、北大獣医学部獣医公衆衛生学講座橋本信夫教授の指導で大学院博士課程に進んでいた。しかし、1992年になり脳下垂体腫瘍による視野狭窄、頭痛などを訴え、6月に北大病院で手術を受けた。腫瘍の完全除去は技術的に困難であったが、幸い、部分切除手術は成功し、ひと月後には回復退院した。しかし、将来の健康不安を理由に UNZA 当局から帰国命令が出ていて、1993年3月末にザンビアへ帰国した。帰国後は変わらずに教育、研究に務めていると聞いて、私どもは安堵していた矢先の訃報であった。同君は人格、識見ともに優れ、将来の UNZA 獣医学部を背負う者として囑目されていた。貴重な人材を失い関係者の落胆も大きい。

1987年、筆者が JICA 派遣短期専門家として、獣医公衆衛生学を講じて以来の、今となっては短い付き合いとなった。以下に筆者の知る限りの彼の生涯の軌跡を記し、併せて哀悼の意を表したい。些か冗長に過ぎるかもしれないが、会員の皆様、アフリカに生まれ、獣医学を志し、かつ JICA の技術協力計画との係わりを持ったひとりの青年の育った環境を知る一助ともなれば、彼の霊も喜んでくれるものと信じている。

1 生い立ちと学業

NGOMA 君は1960年1月にザンビア中北部にある COPPERBELT 州 NDOLA 市で勤め人を父として生まれた。同地区はその名の通り、英国が宗主国の時代からの有数の銅生産地である。彼には両親と姉2人、弟4人の家族がある。10歳で生地に近い MUFULIRA 市の小学校（7年）に入学したが、ザンビアでは7歳が就学年齢なので、家庭には経済上の問題があったかと思われる。小学校在学中に、父は引退し、MALAWI 国境に接する東部州の CHIPATA 市在の祖父の住む村落に移り、小規模の鶏、豚、山羊の飼育農民となったが、その村の Headman であったと言うから父も立派な人物で

あったものと思われる（1992年没）。NGOMA 君はこの後、家族と離れて MUFULIRA 市で中学（2年）、高校（3年）と学業を続けた。これはおば（伯か叔は不明）の援助があったからだと言っていた。私どもがザンビアの良風美俗として常々感心している家族や親戚間の相互援助の一例であるが、勿論、同君の学業が優れていたことに依るものであろう。ついで、1982年にルサカ市にある UNZA に入学し、開設早々の獣医学部に第一回生として進んだ。彼の素質と勤勉とが相俟って、6年間の学部在学中の成績は終始優秀で、卒業時には Outstanding Graduating Student（特別優秀卒業生）¹⁾ に選ばれている。

註1) UNZA 獣医学部では各学年の試験で主要科目毎に、または各学年毎の科目全体で最高の成績の学生は Best Student（最優秀学生）として賞（Prize）が与えられる。第3、4、5各学年の最優秀学生賞、特別優秀卒業生賞や臨床、寄生虫学など計6科目について最優秀学生賞がある。これ等の賞金は個人や企業などのスポンサーにより拠出され、その名を付した賞となる。例えば、The Wellcome(Z) Limited Prize（特別優秀卒業生賞）やインド人協会からの Lusaka Hindu Association Prize（獣医公衆衛生学最優秀学生賞）の如くである。因みに、JICA Prize は第4及び第5学年の最優秀学生にそれぞれ授与されている。何れにしてもインフレが激しいことから、賞金の実質的な価値は非常に低くなっている（The University of Zambia, Samora Machel School of Veterinary Medicine, Handbook 1991/92 参照）。

追加 最近、1994年3月末、UNZA 獣医学部での JICA 業務を終えて帰国した北大橋本信夫教授によると、同学部では今回、The Michael NGOMA Memorial Prize を創設し、微生物学最優秀学生賞として授与することとなった。

2 経歴の概略

NGOMA 君は学部卒業（1988年11月）によりザンビアの獣医師資格を得た。また、卒業と同時に学部最初の教官候補生（Staff Development Fellow）に選ばれた。本制度は当時大学院課程のない UNZA 獣医学部では、修士資格が教官採用の基準となっているので、これを取るための国外留学の時期まで、教官となるべき卒業生に教育研修や研究体験の機会を与えるための給費制度である。同君は翌年1989年8月には EDINBURGH 大学熱帯獣医学研究所（Centre for Tropical Veterinary

Medicin = CTVM)の修士課程へ留学のため渡英した。CTVMでも非常に優秀な成績であったと指導教官のDr. C. DABORNから機会ある毎に我々にも知らされた。かくて、1990年10月ザンビアへ帰国し、同年12月には学部講師(Lecturer Grade III)に任命された。また、JICAのUNZA獣医学部技術協力計画による博士課程研修留学のための文部省留学生審査にも合格し、1991年4月に来日、北大獣医学部橋本信夫教授の指導を受けることになった経緯は冒頭に記した。

次に、筆者の彼との付き合いについて述べたい。

3 出会い

私が同君に初めて会ったのは短期専門家として赴任した1987年2月からの獣医公衆衛生学の講義の時間であった。学生数は13名であったが、連絡その他に必要なクラス代表がもし決まっていたら誰かと聞いたところ、背の高い物静かで、思慮深げな彼が名乗り出た。日本から来たばかりで、不慣れなことも多いので、私の指示を学生へ伝えたり、彼らの考えを聞くなど色々彼の助けを受けた。ところで、私の講義のうちの1回は月曜午後の最初の時間であったが、初回は全員出席で予定通り始められた。しかし、次回からは出席者はまばらで、出席していても、居眠りしたり、欠伸したり、物を食べたりなど非常にだらしがなかった。しかし、開始を遅らせるなどしてなんとか授業をした。この様な訳で限られた期間で短期間集中の講義も計画どおり進まなかった。こんな状況が回を重ねると、私も呆れて学生に対して、この受講態度は一体どうしたことか全く失望したと大声をだした。結局、訳を聞くと月曜午前の臨床科目の牧場実習担当のSUDAN人の教官が熱心な余り時間を超過して授業をするので学生はバスでキャンパスに戻っても昼食をとる時間もなく、かつ、炎天下で実習して疲れたままで講義に出るので、居眠りもするのだと知った。そこで私は疾病予防学講座主任の清水亀平次教授から臨床学講座主任が担当教官に注意するように申し入れてもらった。しかし、事態はその後も変わらなかった。遂に持ち前の癩癪が出て、筆者は授業を始める前に、臨床学講座主任に直接会って怠慢を追及すると言って講義室を出た。心配して数名の学生が私に付いてきた。私は講座主任の部屋で声を荒らげて彼を詰った。その時、心配そうに私を見ていたNGOMA君の顔を忘れることが出来ない。結局は、この件は完全ではないが、多少改められた。余談になるが、私に怒鳴られた臨床講座のDr. M. BAFI-YEBOAはGHANA出身の好人物で、翌年私が長期専門家として再赴任した時は学校からの帰途、清水教授の車で一緒にいることもあって親しくしていたが、その後

まもなく脳疾患で急死した。

さて、前年3か月間の滞在に続いて1988年8月下旬、私が再赴任した時は丁度、NGOMA君の6年学生は卒業試験の最中であった。到着の2、3日間は講座主任の清水教授が臨時に担当していた獣医公衆衛生学の採点や口頭試験に参加することになった。長旅の疲れと言葉が余り解らないために閉口しながらExternal ExaminerのTANZANIAのMINGA教授の立ち合いのもとで、清水教授の助力で何とか責任をはたした。この時NGOMA君に1年半ぶりに再会したのである。

前述の様に彼は優秀な成績であったので、全学の卒業式の前日に行なわれた学部卒業式ではOutstanding Graduating Studentの賞を受けた。そして、1988年11月19日にはUNZA全学の卒業式があり、学長のDr. K. D. KAUNDA大統領から卒業生はB. Vet. Med.の学士卒業証書を授与された。緑色のガウンを着用した卒業生の晴れ姿に列席した私どもも感銘を受けた。しかし、長時間直射日光に曝されて、喉もからからに疲れたことを思い出す。

4 Staff Development Fellow (SDF)

NGOMA君は卒業後の1988年11月には前述の様に、教官候補生(SDF)に採用された。因みに学部第一回卒業生13名中最終的に5名が教官になっている。NGOMA君は獣医公衆衛生学担当教官予定者として、私の担当する公衆衛生学研究室に配属された。

当時の学部長のR. J. THOMAS教授は指導教官の私に対して、SDFにはTeaching, Reading, Writing及びResearchに眼目をおいて指導せよとのことであった。そこで、私は、学生の実習の準備と授業への参加と共に、Topley and Wilson's Principles of Bacteriology, Virology, and Immunologyの一読をすすめた。また、研究としては、と畜(牛、豚)からのサルモネラと大腸菌の分離とそれらの薬剤耐性の調査のテーマを与えた。当時ザンビアではこの種の報告が欠けていたからである。私はこの研究課題によって、実験計画の作成、と畜からの採材、培養、菌の同定などの研究室業務に慣れさせようとした。彼は着実に実験を進め、翌年8月にEDINBURGH大のCTVMに留学するまでには、分離菌の同定を済ませ、次の段階の実験再開までの菌株の保存や詳細な記録の作成をした。もちろん、学生実習授業なども立派に果たした。この他、同じ研究室の鈴木敦子JOCV隊員と共同で、サワーミルクの研究にも加わった¹⁾。もっとも、この間に大学理事会から、SDFは修士号がないので最高学年の6年生への授業は罷りならんなどと杓子定規の通達があったりして、私どもも怪訝に

思ったが、一般講義はさせず専ら実習に止めた。

なお、UNZA 獣医学部には常時数名の男女の獣医師の JOCV 隊員が配置されており、教官（以前は Teaching Assistant、現在は Lecturer Grade III）として授業、調査、研究などの有力なスタッフとなっている。彼らは同時にザンビア国内各所において活躍している獣医師隊員とともに、JAZL (JOCV Association for Zambian Livestock) を組織し、政府畜産局に協力して、定期的に牛ブルセラ病の血清診断や畜牛結核の検診を行い、これらの疾病の汚染度や、診断法の比較検討、農民に対する防疫知識の普及などを数年間にわたり継続実施し、同国の家畜衛生改善に貢献している。NGOMA 君はこの活動にも参加していたが、同年輩の多くの隊員との学外、学内での接触を通して日本及び日本人への関心と理解とが強く育てられたと思う。

5 英国 (CTVM) 留学

さて、1989年8月に1年の予定で、英国の ODA により British Council の奨学金を得て、EDINBURGH 大の熱帯獣医学研究所 (CTVM) の修士コースに留学した。そして、翌年6月には卒業論文以外のコースの試験を立派な成績で終了した。CTVM では修士論文の作成にあたって、ザンビア以外の国でアフリカの実情を体験させるべく、ブルセラ病の調査をテーマにしてザンビアの隣の ZIMBABWE ではどうかと提案してきた。もちろん旅費、滞在費は British Council から支給される。そこで私どもは獣医公衆衛生学の External Examiner を頼んだりして面識のある HARARE の ZIMBABWE 大学獣医学部の K. MOHAN 教授に Supervisor を依頼し、承諾を得た。同教授はブルセラ病の経験も多く、資料の整った国立獣医学研究所の細菌部門を調査拠点として選んでくれた。宿泊場所などの世話をいただいた。かくて、1990年7月下旬から8月末までの数週間、彼は HARARE に滞在し、MOHAN 教授および上記研究所の指導を得て研修及び論文資料の調査を行なった。

私は1990年8月上旬に、ZIMBABWE 大獣医学部を訪問しスタッフに会って同年の学年末試験のいくつかの科目について External Examiner の受諾の確認をしたり、ZIMBABWE 国内を小旅行するため車で家内とともに HARARE に行った。もちろん NGOMA 君に送うのも目的のひとつであった。8月3日夕刻、HARARE 市中央部にある MEICLES Hotel のロビーで約1年ぶりに彼に会った。ホテル近くの中国料理店で夕食を共にし、積もる話に時間を忘れた。私どもはホテルに彼は大学近くの宿舎へと別れた。彼は8月末に EDINBURGH へ戻り修士論文（残念にも論文題名のメモを紛失してい

る）を完成し、修士課程を終了して10月2日にザンビアへ帰国した。

筆者は以上のことを通して、EDINBURGH 大の ODA による留学生指導システムを知って、British Council の奨学給費留学生をさらに他の国へ派遣して教育効果を挙げようとする、形式に囚われない柔軟にして効果的なやり方に感銘を受けた。

ところで、EDINBURGH 大 CTVM ではアフリカ、中近東などの発展途上国から多くの留学生を受け入れているが、その中でも NGOMA 君の評価は特に高かった。CTVM には Vetaid^(註2) と称する畜産開発によって途上国農民の貧困の解消を達成しようとする NGO の獣医師団体が組織されているが、その情報周知のために "Vetaid News" なる機関誌が出されている。その Editor に彼が指名されているのである。このことは指導教官の Dr. DABORN 始め CTVM スタッフの彼への高い評価と信頼の表れと思う。

註2) 1982年 FRANCE の LYON 大獣医学部で獣医師による非政府 (NGO) 慈善団体 Vétérinaires Sans Frontières (VSF) が途上国貧困農民を畜産開発により援助することを目的に設立された。1987年に、同学部から卒業生が EDINBURGH 大 CTVM の修士コースに留学した。彼は CTVM の3名の教官と共に、上記 VSF と同種の "Vets for the World" を1988年春に設立した。獣医界における NGO 組織の専門家小集団である。同組織は急速に拡大し、1988年末には、Vetaid と改称され、翌1989年中頃には拡大役員会を持つ有限慈善団体となった。また、同年 Vetaid は欧州8か国の同種団体 VSF EUROPA の構成メンバーのひとつとなった。その目的は組織間の協力活動促進にある。すなわち、同一地域で活動する二つの組織のためのスタッフの雇用や機材調達などを目的としている。Vetaid は英国の獣医師、製薬会社、個人信託などの基金に支えられている。また、特定のプロジェクトには海外開発官庁などが経済支援をしている。しかしながら、運営や予算面の変化に拘らず、初期の目的とする世界の貧しい人々を助けて、家畜をよりよく飼育して、それにより人々の栄養と健康を改善して行こうとの意図はよく続けられている (Vetaid News, April 1990, No. 4 参照) 註3) 同書第4章第1節に「その NGOMA 君が編集した Vetaid News 誌上に戻り、自分の履歴を記している。彼の中で、彼が同様に獣医学を志したかについて語っている事実に感銘を受けた。」

に、小学校の時に父と家族は東部州へ移り、彼はおぼの所にとどまり学業を続けた。そして、時折、遠い父や家族の所を訪れていた。そこでの祖父の牛の群れの番をしていた記憶が鮮明であるという。また、East coast fever、アフリカ豚コレラ、ニューカッスル病などの流行発生にもよく遭遇した。特にニューカッスル病の流行時に、病鶏の瀕死の足掻き、それを見る人々の狼狽と困惑の表現が後々まで彼の脳裏を去らなかつた。家畜衛生への強い関心はこの頃に培われたのである。こんな理由で、彼は大学では迷うことなく獣医学部に進んだのである。

6 獣医学部講師就任

さて、1990年英国よりの帰国後 NGOMA 君は学部講師 (Lecture Grade III) に任命され (12月7日付き)、獣医公衆衛生学教科の主に実習面を分担していた。研究では留学により中断していた腸内細菌分離株の薬剤耐性検査にかかりきった。なお文部省の博士課程留学生の応募手続きはルサカ市の日本大使館で応募書類 (英国より送付) 審査と帰国後の10月3日の面接により、現地での手続きは終了していた。1991年の日本への出発予定までは半年間の短期間なのでかなり忙しい様子にみうけられ、夜遅くまで仕事をしていた。

この頃のある日の講座会議の席上で私の印象に残ることがあった。当時講座には近隣国の出身教官がいたが、理屈っぽい議論好きの人物であった。その会議でも、細かいことをおねねと発言していて、見方によっては会議の議論を楽しんでいるとも思われた。早く終わらせた私には、かなりイライラしていた。その時、若輩の NGOMA 君はその教官の所説に反論し、長引く会議を纏めてくれた。私にはとても頼もしく見えた。改めて彼の力量を認識した。

7 日本留学

日本での審査の結果、留学が認められ、1991年4月1日にルサカを出発した。まず研究生として北大獣医学部獣医公衆衛生学講座の橋本信夫教授の指導を受け、9月までは日本語の研修に励んだ。これも優秀な成績で、無欠席で模範的な学習態度で、文化的背景の異なる国から来て、これ程適応したのは、並大抵の努力ではなかつたろうとの日本語教官のコメントがあった。引き続き大学院博士課程の入試にも合格した。

私は1991年9月末に JICA の仕事を終えて、ザンビアから札幌へ戻った。丁度半年ぶりの彼との再会となった。早速橋本教授と相談の上、ザンビアでの彼の研究成果を翌春の日本獣医学会で日本語で発表して貰うことにした。そこで、その打ち合せに頻りに彼と接触した。このことで最も困ったことは、短い発表時間内では内容を纏

めきれないことであった。しかし、高島助教から教室の方々の指導によって何とか解決した。1992年4月はじめの公衆衛生学分科会で口頭発表を行なった。その結果、参会者から称賛の拍手をいただいた。なお、学会後4月下旬まで、彼は父を弔うためにザンビアへ一時帰国した。その後は本格的に大学院課程にとりかかった。

8 発病、帰国

1992年春頃から彼は視野狭窄や頭痛に悩まされる様になっていた。結局5月末に、重い頭痛を發し、診察の結果脳下垂体腫瘍と判明、6月に北大病院で手術を受けたことは冒頭に記した通りである。1か月間の入院で回復したが、この頃、UNZA から、将来の健康不安を理由にザンビアへの帰国命令を受けた。率直に言って、彼はこの件では大いに不満だった様で、博士課程の論文研究にかかれなことを残念がっていた。北大獣医学部としても、大手術後に医療施設の貧弱なザンビアへすぐ帰国させることには不安があったものと思われるが、帰国命令に従うことは仕方のないことであった。結局、手術後の回復を確認するための定期検査を済ませ、かつ文部省の奨学金給付の一応の区切りとなる1993年3月末まで滞在して帰国することになった。

この間に橋本教授は帰国後、現地の条件下でも可能と思われる博士論文研究のテーマについて NGOMA 君と論議を重ねた、また、各種の手技の研修を行なった。もちろん、彼は学会で発表した報告の論文を完成して、Jpn. J. Vet. Res. に投稿した。これは帰国後に印刷公表された⁶⁾。彼のため、北海道ザンビア会 (会長：藤本胖北大名誉教授) 有志で送別の席を設けた。かくて、彼は1993年3月末に、故国に向けて札幌をたった。



写真 Dr. Michael NGOMA 送別会
前列右より Dr. M. NGOMA、橋本信夫教授、筆者
後列右より 橋本教授夫人、藤本胖名誉教授、高島郁夫助教

9 急逝

帰国直後の4月6日付けの彼の手紙を受け取った。内容は現在は環境整備中である。また、学部長の C. E. LOVELACE 教授や Dr. G. S. PANDEY らの学部や講座の関係教官とも、これからの各種予定など論議中である。今後ともよろしくとの簡単なものであった。帰国直後の忙しい中で書かれた、この手紙に改めて几帳面な彼の性格を感じた。この後、私どもの周囲から派遣された専門家を通して彼の消息が幾つか届いた。これら専門家は UNZA 滞在中に NGOMA 君の親身の協力に感謝し、彼の人物に強く引かれていたとのことであった。私は橋本教授と共に彼が日本人専門家の業務遂行に役立っていることを喜んでいた。彼は今後の研究対象を、北大で予定していて果たさなかったシッターコーススとしたいとの連絡を受けて、橋本教授は使用菌株を送っていた。

そこへ突然の訃報を受けたのである。その頃、丁度 UNZA に居た JICA 専門家の梶 隆教授からの報せによると、1993年9月末から頭痛を訴えて、大学病院にも2回程度通院していた。また、この間も日に2・3時間は出勤していた。しかし、10月7日に容態が急変し、歩行困難、意識不明の状態となり、急ぎ入院した。そして、翌々日に NGOMA 君はこの世を去ったのである。現地の JICA 事務所では医療施設の整った隣国の ZIMBABWE に彼を送ることを検討していたが間に合わなかったのだとのことであった。彼の遺体はルサカ市の LEOPARD HILL の公共墓地に埋葬された。

私どもが将来はザンビアと日本の掛け橋にと期待していた NGOMA 君はこうして亡くなった。志を遂げることなく急死した彼が可哀相でならない。私は今でもアルバムの中に彼の姿を眺めている。まだ学生の時にと畜実習でのスクールバスの前のクラスメートとのスナップ、ルサカ市の拙宅のパーティーの時、JOCV 隊員と踊っ

ている様子、札幌の私の家で年越しの晩に孫や家族と写っている姿などである。これらを見ていると、まだ彼が亡くなったとの実感が湧かないのである。

Dr. Michael NGOMA よ、君はこれからも私どもの友人である。ルサカ市の墓地 LEOPARD HILL から大学を望み、獣医学部の発展と君の国と日本とのこれからの交流の深まりを見守っていて欲しい。君よ安らかにねむれ。

(1994. 4. 18)

参考資料

- 1) SUZUKI, A., NGOMA, M. et al. : A preliminary report on bacterial flora of the traditional sour milk in Zambia. Zimbabwe Veterinary Association Congress, 5-8 Sept., Kariba (1989).
- 2) NGOMA, M. : Editor's brief profile. *Vetaid News*, No. 4, 4 (1990).
- 3) SATO, G. and NGOMA, M. : Antibiotic resistance of *E. coli* and *Salmonella* isolated from apparently healthy slaughtered cattle and pigs in Zambia. School Seminar, UNZA, 14 Aug. (1991).
- 4) NGOMA, M., 鈴木敦子ほか：ザンビアにおけると殺牛及び豚由来大腸菌とサルモネラの薬剤耐性。第113回日本獣医学会，4月2-4日，相模原（1992）。
- 5) TAKASHIMA, I., NGOMA, M. et al. : Antimicrobial effects of a new carboxyquinoline drug, Q-35, on five serogroups of *Leptospira interrogans*. *Antimicrob. Agents Chemother.* 37, 901-902 (1993).
- 6) NGOMA, M. et al. : Antibiotic resistance of *Escherichia coli* and *Salmonella* from apparently healthy slaughtered cattle and pigs, and diseased animals in Zambia. *Jpn. J. Vet. Res.* 41, 1-10 (1993).

れて来た国民党政府の長い支配が暗い影を落しているようにも見受けられた。自分達の国作りも急務なのだろうが、余り云う事を聞きそうにない国民を治める政治家は大変だと思うし、反面云うことを聞く人々を治める国の政治家より偉いのかも知れないと思う事もある。

註、筆者は台湾台中市にある国立中興大学獣医系の客員教授として滞在中、大学所在地は台中市国光路250号の1、電話(04)2870180、呼217です。

【図書紹介】

既刊及び新刊の ザンビア紹介図書について

佐藤 健 平

株式会社北海道ラジオアイソトープ
センター応用医学研究所

一連のザンビア紹介図書に、最近新たに加わった佐藤良彦氏の著書（住んでみたザンビア……獣医師のアフリカ不思議体験記、サイマル出版会、1993年8月25日刊、1,800円）を紹介したい。その前に、まず既刊のザンビア紹介書についてのべる。

国際交流特に発展途上国との技術協力の進展に伴って、かなりの数の北海道獣医師会会員が海外に出掛けている。ザンビアについては、JICAのザンビア大学獣医学部技術協力計画が発足して8年にもなるので、本会会員もザンビアを知る機会も多かろうと思われる。ところで、筆者の知る限りではこれまでに、JICAの海外技術協力に関連して3冊のザンビア紹介図書が出版されている。

まず、青年海外協力隊（JOCV）事始めの頃、最初にザンビアに派遣され、柔道指導に従事した一隊員の情熱溢れるザンビア体験の記録（松下文治：ザンビア・太陽の國、エディターズ・ユニオン、1985年3月20日刊、1,500円）がある。同じく、女性のJOCV隊員で村落開発普及員として派遣され、ザンビアの地方の現地の人々、特に婦人達との交流やその間の仕事の実態から開発援助を見結めた内容の著書（荒木美奈子：わたちの大地……「開発援助」フィールドノート、築地書館、1992年9月25日刊、1,700円）がある。しかしながら、本会会員として、JICAのザンビア大学獣医学部技術協力計画に、その発足準備段階から関わり、さらにプロジェクトリーダーとして、3年半の間、目的達成のため努力された藤本 胖北大名誉教授とその夫人の著書ほど、本会会員に

ザンビアをアピールしたものはないと思う（藤本 胖、藤本俊子：ザンビア動物記、共同文化社、1991年8月20日刊、1,500円）。藤本教授夫妻の著書では、その書名が示すように、野生動物の宝庫であるザンビアの詳細な記録と共に近隣の東・南部アフリカの動物の状況も紹介されている。さらに興味深いことは、主婦の目から見たザンビア生活が書かれていて、ザンビアの人と社会を理解するのに大いに役立っている。その一部は本格出版前に、本誌に掲載されていて、会員の好評を博していた。また、JICAの上記協力計画発足の背景やその実施状況及び獣医師の係わる国際協力の在り方などについての記載は、読者に示唆するものが多い。

次に、冒頭に掲げた佐藤良彦氏の新刊書の内容を紹介する。本書の性格に大に関係すると思われるので、著者の経歴に触れておく。著者は長野県職員の獣医師である。1978年から3年間JOCV隊員として、タンザニアで活躍し、さらに1989年から2年間、前記のザンビア大学獣医学部技術協力計画に長期専門家として派遣され、獣医血液学（獣医臨床病理学の一部）を講じた。また、1985年には、エチオピアでの国際医療チームにも短期間ながら参加している。この様に、著者は若くしてアフリカを目指したJOCV隊員経歴者（OB）である。本書には著者の2年間のザンビア滞在中の体験、見聞が詳しく紹介されている。私も1988年から3年余り著者と同時期に、同じプロジェクトに参加しているの、特に感銘深いのかも知れないが、本会会員諸氏にも有意義と考え新刊紹介の筆をとった次第である。

本書の内容は6章からなっている。第1章（ザンビアのユニークな人々）では、大学の職場での職員や学生との関わり合いから、私どもには理解困難でもある現地の人々の考え方、生活様式などに触れている。第2章（住んでわかった暮らしぶり）では、首都ルサカの紹介に加えて、そこに住む現地の人々や在留日本人の暮らしぶりやザンビアの食体験、また、衛生や経済面の立ち後れに由来する色々の体験が語られている。第3章（ザンビアのわが家）には、著者はザンビア入国時は家族構成は夫婦2人であったのが、2年後帰国の際は4人になっていることから解る様に、忙しく過ごした家族の歴史が書かれている。ザンビア滞在中にブラジル日系二世の夫人は出産のためブラジルに2回も渡航したことやルサカでの住宅の状況、隣人との交流や休暇で旅行したヨーロッパでの体験も述べられている。たとえば、勤勉に耕した自家菜園のこと（我が家でもしばしばお裾分けに与った）、良き隣人（ヨーロッパ系の人々）に恵まれたことやブラジルで出産した夫人とのやり取りなどの微笑ましい描

写がみられる。第4章(大自然の魅力を訪ねて)では彼の地の季節感、ビクトリア瀑布、野生動物の豊かな各地の国立公園などの紀行が述べられている。また、その間にみた焼畑農業や薪炭のための伐採が賣らした森林破壊の実情を憂えている。第5章(こちらザンビア大学獣医学部)では、著者の職場である獣医学部で活躍するJOCV隊員、与えられた業務の遂行状況、経済悪化による待遇低下が賣らした大学の教官の流出、援助側の日本人スタッフと現地教官とかヨーロッパ系教官との間の避けがたいギャップの存在などが述べられている。また、業務出張で遭遇した各地方の状況、大学の成績審査のやり方や現地人とかインド系職員との交流が示されている。第6章(ザンビア共和国への招待)では、発展途上国としてのザンビアの経済と社会の実態、政治や経済の不安に原因する暴動発生時の体験談、都市と農村の格差や農畜産業、漁業などの実情、貧弱な教育と医療体制などが具体的に示されている。なお、著者はJICA主催の写真コンテストで何回か上位入選をとげている写真愛好家である。本書にも沢山の人物と自然などの適切かつ美麗な写真が掲げられ、読者の理解を助けている。

私は今回のJOCVOBの佐藤氏の著書やJOCV隊員の前掲松下氏及び荒木女史の著書に接して思うことは、これらの著者の強いバイタリティーと周囲の人々との濃やかな付き合いの模様が鮮やかに窺い知れることである。私は大学の定年後に佐藤氏と同じプロジェクトに参加していたが、当時、その様なことを常にJOCV隊員や若いスタッフに感じていた。勿論、私の様な年配者に与えられた職分の違いや体力の差もあるが、若い年齢層の方々の元氣溢れる活動や人との交流の広さと深さには驚いていた。そしてまた、アフリカに寄せる彼らの思いの強さや実行力に感心していた。私はその頃から、彼ら

とザンビアとの係わり方は完全に立体的であり、年配者の私については、平面的なものになっているのではないかと思っている。佐藤良彦氏の著書には著者の広く深く、かつ細やかな観察眼に支えられた内容がある。数字による説得力がある。同じ年限を同一職場に過ごしたに拘らず、私には遠く及ばない把握がある。なお、著者は本書以外にも、既に数編のザンビアの家畜衛生についての研究論文も発表している。こうしたことから、わが国の海外協力を担う若い世代のエネルギーには大いに期待出来るものがあることを改めて知った次第である。

海外青年協力隊が1964年に発足してほぼ30年、この間に1993年8月までに延べ13,114名が派遣され、現在(今年8月)は2,067名が海外で活躍している。一方、技術協力のため海外に派遣されたJICA専門家はこれまでに、延べ36,817名に達しているが、これらの専門家には多くのJOCVOBが含まれていることは衆知のことである。それ故、若しJOCV組織がなかったら、現在急激に進展した日本の海外技術協力は支え切れず、著しく立ち後れるか、かなり不満足なものとなっていたと推測される。海外技術協力では単に移転するべき技術レベル云々と言うだけでなく、より根本的には海外に寄せる関心や海外事情の理解に裏付けられた強い意欲が必須として求められている。

以上、佐藤良彦氏の著書は国際協力に関心をもつ獣医師、学生は勿論、アフリカに興味のある一般読者にも興味深く読まれるものと思われる。そして、読者は開発途上国とは生活事情の全く異なった環境に過ごしている我々日本人も、海外では与えられた不如意な条件下でも結構やれるものだと自信を持つ様になることを疑わない。

(1993. 10. 25)

平成5年度学会年次大会

と き 平成6年2月11日(金)~13日(日)

ところ 島根県松江市

島根県立産業交流会館(くにびきメッセ)

ザンビア大学獣医学部での1年

内科学第二講座 小林 好作

1992年11月から93年12月まで、国際協力事業団の専門家としてザンビア大学獣医学部に派遣されました。短い間でしたから彼の地の全体像を記すことはできませんが、印象の一部を綴って帰国報告とします。

1. ザンビア共和国の概要

アフリカ大陸には52の独立国があります。ザンビアは南緯9～18度、東経23～34度に位置し、周囲を8つの国にかこまれた内陸国です。昔はイギリスの植民地でしたが、1964年に独立、今年で30年という若い国です。面積は約75万平方キロ、人口約820万。近年人口の都市集中が増し、67%がいくつかの大都市に移ってきている模様です。90年までは統一民族独立党以外の政党は認められていませんでしたが、それ以後は多党制となり、民主化が進んでいます。周辺国のなかには政治的に不安定なところもありますが、ザンビアは一応平穏を保っています。経済面からみると、主産品である銅の国際価格の下落に伴って困難な状態が続いており、対外債務は6兆ドルともいわれています。したがって人々の日常生活は決して楽ではありません。

2. ザンビアの畜産事情と日本の援助

前述のように銅の輸出に依存できなくなったので、国の経済政策の重点を農業と農村の開発、人材育成におくようになりました。これらの計画に対し、日本から有償・無償の援助が行われています。「ザンビア大学獣医学部技術協力」はそのうちのひとつで、1985年から始まりました。具体的には本部棟、2つの教育棟、設備供給棟、講堂、図書館、動物舎および学生宿舎を建設してザンビア側に引き渡すとともに、学部教育担当の日本人専門家を10～14名、海外青年協力隊員数名を毎年派遣してきています。

現在ザンビアには牛320～340万頭、緬・山羊60万頭、豚30万頭ほどが飼育されているといわれています。牛についてみると総人口に対する割合は0.4前後で、これを当面1.0にまでふやそうとしています。土地や水利の条件はまあまあとしても、飼料供給や衛生対策に難点があり、どうしても自国で獣医師を養成する必要にせまられているのです。つまり家畜増殖計画の目標達成には、トリパノゾーマ病、ダニ媒介による各主原虫病、口蹄疫・牛疫・狂犬病などのウイルス疾患、出血性敗血症・ブルセラ病・結核・炭疽などの細菌性疾患の予防と防遏が絶対に必要なのです。国連食糧農業機構（FAO）は、ザンビアに300名の獣医師が不可欠と勧告しています（1981年）。ザンビア大学獣医学部ではすでに今年で

一連の試験や発表会が終るとコンパになるのは日本と同じです。「プロフェッサー！一緒にやろう」と誘われてうっかりのりと朝までつきあわせられ、おごられます。実習設備や図書はまだまだ充実していませんが、学生たちは総じて熱心です。講義中に私語がなく、途中でもどんどん質問してきます。この点は日本の学生が見習うべきです。

100名近い獣医師を輩出しました。彼らの多くは政府農業省の職員・技術者として各地で活躍しています。

3. ザンビア大学獣医学部の組織

ここには4つの大講座があります。1つの講座は日本の学科に相当すると考えていいでしょう。

1. Biomedical Science (解剖・生理・生化学など)
2. Paraclinical Studies (病理・寄生虫・微生物)
3. Disease Control
(伝染病、公衆衛生、臨床病理)
4. Clinical Studies (内科・外科・繁殖)

Disease ControlにはDiagnostic Laboratoryが、またClinical Studiesには動物病院が付設されています。それぞれの講座には教育スタッフとテクニシャンが配属され、担当科目の講義と実習、市民や農民へのサービス（診療や検査）を行っています。

4. 朝は8時から講義が始まります。1コマ60分で、たいていは1科目について2コマ続けて割当てられていますから、実質は120分授業ということになります。時間割表の上では休み時間を作っていませんので、1コマ終わると10分ほどの休憩をとります。12時から14時までは昼休み。日本と同じで実習は主として午後集中します。17時になるとスタッフがどんどん帰ってしまうので、授業・実習を続けられません。実習も終わったし、学生も帰ったから、さて自分の研究をはじめようかなんて考えてもダメです。あらゆる実験室に鍵がかけられてしまします。自分の部屋で仕事をしていてしめ込まれてしましそうなこともありました。

学期は3学期制で、昨年度は1学期3月8日から5月14日まで10週、2学期5月31日から7月30日までの9週、3学期は8月9日から10月8日まで9週でした。土・日曜は完全に休みですが、日本のように祝祭日が多くありません。3学期が終ると3週間にわたる試験があり、筆記、実習、口頭の3種類でしぼられます。口頭試験には他の国の獣医大学の教授が試験官に加えられ、学生ばかりでなく教員もひやひやです。これはイギリス方式なのだそうです。試験が終ると長い休暇に入りますが、4年生は学部内の各実験室を1～2週毎に順にまわって、5年生は地方の家畜保健衛生所に数人ずつ、それぞれ長い実習をしなくてはなりません。すべての試験に合格した6年生は卒業です。卒業論文はありませんが、6年生の間に自分たちが診療した症例についてレポートを提出し、口頭発表をしなければなりません。どちらも複数の教員によって評点が与えられます。これら

各学年の代表が教授会に出席していることもありました。学部長はじめ教員は学生の発言を保証し、少なくとも会議の場では対等に扱っています。学生も論理的できちんとした発言をしているのが印象的でした。

短い文章で語りつくせない貴重な体験をしましたが、とりえず帰国報告といたします。

ザンビアでの一年

小林好作(敬33)

孫 忍

ザンビア大学獣医学部で教えてみないかという話が舞い込んだ。...

責任

机上からみたアフリカの大地は赤く、緑も多かつた。...

予習

あたふたと準備をしなが、ザンビアとアフリカの知識を仕込みはじめた。...

産 業

ザンビアからザイールにかけては、アンデス諸国や北米大陸とともに世界の三大銅地帯である。

現在でも銅はザンビアの主要輸出品であるが、国際価格の低迷から、...

心となって人材を派遣し、家畜衛生に携わる若者を養成している。...

給するにほもと頭数をふやさなくてはならないが、飼養方法の改善や病気の予防を指導する技術はならないのである。...

たべものとか飲みもの、純日本の調味料や食品を除けばなんでもある。海のない国だから、海産物はない。...

うり、キャベツ、白菜、大根、にんじん、ピーマンなどなど、日本のハウスものよりおいしい。...

その中に保護されている。象、ライオン、バッファロー、インパラ、イボイノシシ、レチエウ、ゼブラ、キリン、ワニ、カバなどを見ることが出来る。...

友人連よ

隣国のいくつかでは内戦と、それに伴う飢饉や難民問題を抱えているが、それにくらべるとザンビアは平穏である。...

随感

「シマ」を食べる

麻布大学獣医学部教授
小林 好作



九二年末から一四カ月にわたり、国際協力事業団の専門家としてザンビア共和国に住んだ。日本人に伝えなくてはならないことはたくさんあるけれども、ここでは人々の主食であるトウモロコシの話に限ろう。

九二／九三年の作付面積は六三三三平方キロ（群馬県の面積に相当）、見込み収量一六〇万ト。一人が一年に一四六キロ食するとされており、総人口八二〇万人を乗すると約一二〇万トになる。予定どおり収穫がすすめば多少は備蓄ができたはずである。

九三／九四年はどうだろう。雨期が早く終わってしまったという話を聞くと心配になる。地図の上ではたくさん川があるのだが、乾期にはその多くが干上がっている。灌漑が普及すれば二毛作も可能だという。現に、大型農場では地下水を汲みあげて散水し、乾期にも畑を青々とさせている。しかしこの国の水に含まれる石灰分の濃度は相当のものだから、やがて表土に蓄積してしまうのではなからうか。わが国の水田における水利の賢さに改めて思いを馳せた。さてどのようにしてトウモロコシが食卓にの

るか。一般には製粉工場で白い粉にされ、袋詰めされて市場に出る。これをミルミルという。等級がいくつかあって、だれしも高級品を買いたがる。かんばつによる不足を補うため「黄色トウモロコシ」を輸入したが、さんさんコケにされていた。

大鍋に湯をわかし、ぬるまったところに篩にかけたミルミルを少し入れて、頑丈な柄の長いしゃもじでゆっくりとかきまぜる。温度が高くなるにつれてとろみがでてくる。そうしたらさらにミルミルを加え、今度は力一杯鍋の底のほうからひっくりかえすようにかきまぜる。ぐずぐずしているとこげつかしてしまふ。やきたてのパンくらいの硬さになったらでき上がりである。

首都周辺ではこれを「シマ」と呼んでいたが、地方では別の呼び方もある。家庭でのシマ作りは、主婦の仕事である。みんな驚くほどたくさん食べる。副食は野菜の油炒めで、肉が入れば上等。飽食の日本では考えられない粗食だが、農家の庭先で食べる手作りシマはほんとうに美味しい。

資 料

ジャカランダの咲くところ ザンビアの3カ月-(1)

岡 田 幸 助

1996年7月から9月末まで国際協力事業団 (JICA) の要請で免疫病理学の短期専門家としてアフリカのザンビア大学に派遣され、大学院生・学生およびカウンターパートの指導にあたってきた。そこで様々貴重な体験をすることが出来たので以下、ザンビアにおいて経験したことを紹介したい。

1. 渡航準備と渡航

派遣に際し徹底的な健康診断が要求された。指定された病院で診断を受け、JICAの専門医のOKが出るまで何度でも再検査を受けなければならなかった。また、狂犬病、黄熱、B型肝炎、破傷風などのワクチンを受けなければならなかった。それぞれのワクチンに接種間隔が指定されているので渡航まで2カ月しか余裕がなくワクチンプログラムを立てるのが大変であった。ザンビアではエイズウイルスの危険が高いため、歯科、散髪、輸血を必要とするような手術は避けたほうが良いという。そこで虫歯を治し、出発直前に散髪をして3カ月間散髪をせずに我慢した。ところが到着後すぐ歯が欠けてしまい帰国まで歯に物が挟まってしよるがなかった。メガネを壊すとザンビアでは自分に合ったメガネの調整が困難なので全く同じメガネをもう一つ用意した。最も危険の高いのがマラリアである、蚊に刺されないのは不可能であるからだ。そこで蚊取り線香180巻 (90日分)、忌避

剤、防虫スプレーなどありとあらゆるものを持っていった。また途中ロンドンの指定された薬局でメフロキンを購入し、毎週1錠、帰国後も1カ月間飲み続けた。この薬は頭痛など副作用の出ることもあるそうであるが幸い私は副作用が出なかった。

食料品はみそ、醤油、乾物、レトルト食品を可能なかぎり持参した。米は現地の調整員の人を手配してくれていた。そんなわけで手荷物は90kgに達した。ザンビアの首都ルサカまで直行便はなく、成田からロンドンまで12時間、ロンドンからルサカまで12時間かかった。ロンドンまでは手荷物を30kg+40kg、計70kgまで認めてくれたが、ロンドンからルサカ間は+30kgしか認められず、ロンドンでリュックサックを買って、10kg分移した。結局、最後には30kg引きずって辿り着いたことになる。飛行機は生まれて初めてのビジネスクラス、こんなにサービスがよいものとは知らなかった。

2. 到着

ザンビアは南緯15度、1,400mの高地にあるので比較的涼しくアフリカの軽井沢と言われている。到着後早速、インターネットのe-mailで教室に手紙を書いた。

「病理学教室の皆さんお元気ですか。

お陰様で予定どおり無事ルサカに到着しました。体調も問題ありません。



写真1 メイダのマギーとフラットの前で

ザンビアは日本の国土の2倍の所に、1,000万人程の人しか住んでいません。ルサカの人口は約100万人だそうです。空は真っ青で、夕焼けや日の出はとても美しいです。これから乾期に入り雨はほとんど降らないそうです。草は徐々に枯れ始めていますが、ハイビスカスやブーゲンベリア、そして名前のわからない美しい花がいっぱい咲いています。ザンビアの人は皆真っ黒で、夜など洋服だけが歩いているように見えます。昨夜(5日)は新しく到着した我々3人(藤田、菱沼、岡田)の歓迎会でした。ワニの肉のペーストをパンに付けて食べましたがあっさりしていて違和感はありませんでした。ステーキはダチョウの肉で多少硬かったですが、結構こくのあるおいしい肉でした。気温はかなり低く、レストランでは足元に電気ストーブが付けてあったのには驚きました。黒人は暑いには平気ですが、寒さには弱いようです。こんなに寒いのに蚊がいるのは不思議です。マラリアにかからないよう早速蚊取り線香をたいたり、液体アースマットを取り付けました。(コンセントにさしておくとも60日もつという宣伝であったが30日しか持たなかった、説明書を良く読むと夜間だけ使用の場合であった。)

ホテルの宿泊は1泊だけにして、翌日から早速フラットという3LDKの1戸建ての住宅に移りました。6戸が一つの塙の中にあり、各戸に十分な広さの庭があります。私の家の庭には

実の沢山なったパパイアの樹があります。門番が2人、庭師が1人、メイドが1人居ります(写真1)。皆とてもまじめに働いてくれます。窓には鉄格子が部屋の内側に取り付けてあります。ガラスが割れたら、逃げる時間をつくるためです。寝室には緊急用のボタンがあり、それをおすと5分以内に20人のガードマンが駆け付けてくるそうです。また各自に無線機を持たされ、いつでもJICA関係者と連絡が取れるようになっています。全ての扉にカギがあり、その数がずさましくカギの管理が大変です。

通貨はワッチャといい、小額紙幣しかないのでちょっと両替すると大変な量の札束を持たされ、財布にはとても取まりません。クリップで留めた札束で買い物をして、お札には金額によって象やキリン、国鳥の鷺などが描かれ、記念にもって帰りたいと思います。

私のフラット(自宅)に電話が付きまして。時差は日本から7時間引いてください。日本の午後4時はザンビアの同日午前9時です。(7月4日記)

ザンビアは現在非常なインフレにある。1984年に1ドルが250円の時、1クワッチャが114円であったものが、89年には1ドル140円で、1クワッチャ9円、今年(92年)は1ドル107円で、1クワッチャ10銭にまでなってしまった。

3. ザンビア大学

ザンビアにはウシが320万頭いるが、かつてこの国に獣医師の教育をする大学が無かったので、酪農振興のため獣医学部の設置が望まれていた。そこで1985年10月日本政府が40億円の無償供与を行い、ザンビア大学に獣医学部を創設した。また92年10月には大学院修士課程が設置された。

「病理教室の皆さんお変わりありませんか。現在は早春、乾期にあたります。寒いので毛布を3枚重ねて寝ています。小生も元気に過ご

しています。夜の間に泥棒を威嚇する銃声が聞こえたなどと皆が言っていますが、私はそんなことも知らないでのんきに寝ておりました。

さて病理はバラクリニカルという大講座に所属しています。教室には松川先生（元酪農学園大学教授）、昨年北大で学位を取ったバイヤット、7年前岩大に研修に来たマクセルがいます。バイヤットはこちらでは講師で、何かと私の面倒を見てくれます。マクセルはやめてしまったといううわさもあり、心配していましたが元気に働いていて安心しました。以前岩大で魚病学を教えてくださいました長林先生もお元気です。

12日金曜日に解剖がありました。肺炎と腸炎の仔牛と管理不良で死亡した仔豚3頭でした。テクニシャンが手伝ってくれて割と早く終わりました。これからどんな病気と出会えるか楽しみです。

大学の建物は赤いレンガ作り風で、真っ青な空と良くマッチしています。掃除も行き届いて清潔な感じですが、キャンパスは広く、ブーゲンベリアの植え込みや、アフリカ独特の樹木が植えられて良く整備されています。余裕ができれば大学内を探索してみたいと思っています。

大学にはJICAから私たち3人に与えられた、三菱のワゴン車ランサーGLX（新車）に乗って通っています。菱沼先生も私もペーパードライバーなので専ら運転は藤田先生です。こちらの人たちは運転マナーが悪く、すごいスピードを出し、車や道路も整備不良で、事故が頻発しています。でもいつまでも藤田先生に甘えてはいられないので2人で練習に励んでいます。面倒なことに、車には盗難防止のため、警報装置が設置してあり、操作を誤ると車は私を泥棒と認識し、けたたましい電子音を発します。さらに駐車して車を離れる時にはハンドルに重たい長さ60cmぐらいの鉄棒のようなカギをはめなければなりません（写真2）。それを外すのにも

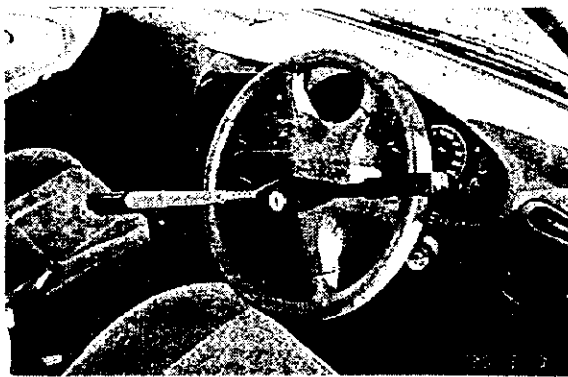


写真2 ハンドルロック

こつが必要で、なんとも面倒です。買い物にはこの車でいきますが、みだりに街をぶらつくと、強盗に襲われますので、さっさと用を済ませて帰らなければなりません。

先日岩大卒業の門平先生（疫学の長期専門家）に郊外の農家の調査に連れて行っていただきました。そこは街とは異なり平和そのものです。泥と萱で作った丸いマッシュルームハウスが5～6戸で1軒の家をなしています。すなわち一つ一つのハウスは我々の部屋に相当するのです。奥さんも2・3人いて、それぞれ別の部屋（ハウス）に住んでいるのでプライバシーも保たれるというものです。とても優しい純朴な人たちで手をたたく独特なしぐさで私たちを歓迎してくれました。ウシを数頭とニワトリやアヒル（首に毛のない独特な品種）を飼っています。服装は民族服を着ているわけではなく、我々と同じ洋服です。日本の弥生時代の様な生活と現代が入り交じり不思議な思いがします。せっかくのんびりと平和な生活をしているのに、我々が侵入して無理に近代化する必要もないように感じました。子供たちのきらきらした目がとても印象的です。（7月13日記）

こちらにはマクセル君のような黒人と、少数のインド系の人があります。こちらの学校にいる黒人のスタッフのほとんどの人は日本に留学や研修を経験しているので、日本式にお辞儀をしたり、日本語で挨拶をします。アメリカで

会った黒人の人とずいぶん印象が違い温かな感じがします。(7月30日記)

ルサカにおける一般の市民は、コンパウンドと呼ばれる居住区に住んでいる。ブロックを積み上げた簡単な家で、数家族が一緒に住んでいることが多い。電気を引いている家と引いていない家がある。金曜日の夜はお酒を飲んで一晩を踊り明かすのが楽しみのものである。

4. 通信事情とインターネット

以前は日本に手紙を出すに2週間ほどかかった。現在でも航空便で10日程かかる。電話も設置台数が少なく、なかなか繋がらなかったという。多田チームリーダーによるとインターネットができるまでは日本との連絡はもっぱらFAXで行っていたのでその代金がばかにならなかったそうだ。今回の滞在は以前の短期専門家からお聞きしていたよりはるかに快適な生活を楽しむことが出来た。その一つはインターネットシステムの確立であろう。日本からの連絡事項を大学まで即時に受信でき、夜間フラットから返事が出来るのは何にもまして有り難かった。

「フラットには3台の電話が設置され、e-mailも使えます。Netscapeをつかって朝日や読売のニュースも見ることができて、先人のかたがたに申し訳ないみたいです。パソコンは短期専門家の3人ともMacのPower Bookを持参しました。アドレスはJICAが短期専門家のために取ってくれていて、我々が到着する1週間前から繋がっていました。共通のアドレスですが、各人に書簡箱があり、秘書が分別することになっています。実際は我々の方が早く大学に着くので自分たちで分別していますが、受信は大学で一括して行い、送信は各人自分のフラットまたは大学から行っています。自分でもアドレスを取得できますが、短期ですし、現在さほど不自由を感じていないのでこのままアドレスを取らないでいこうと思います。私の場合、岩

手大学の私のアドレスに来たものは、ザンビアに転送するようにしてあるので、委員会の様子や、岩大の停電や断水のお知らせまでわかります。パソコンを持参するのに荷物になる、盗難の危険があるなど躊躇しましたが、持ってきてよかったと思っています。こちらの大学でも光ケーブルの工事が始まっています。内線電話もほとんど機能していないのにどうなるのだろうと疑問を感じますが、こと情報に関しては世界共通になったと思います。さてそこで私達は何をするか、ザンビアの人たちは何が幸せかが問われます。(7月15日記)

お変わりありませんか。わたしはこちらの様子にようやく慣れてきたというところです。10月に大統領選挙が予定されていて、爆弾騒ぎ(1人死亡)などもあり、治安がさらに悪くなる恐れがあるので、本日治安対策のための無線機のテストをやりました。日本人は全員無線機を持たされています。日本のようにどこにでも電話がありませんから、時々これを使って交信ができるので大変便利です。最初は全員に聞こえるチャンネルで話し、相手が出たら特定のチャンネルに切り替えて話すのです。しかし、時々切り替えるのを忘れてルサカにいる80人ぐらいの日本人全員に聞かれてしまうこともあります。(7月30日記)

5. 中学・高校生の発明工夫コンテスト

7月にJETS(The National Fair of Junior Engineers, Technicians and Scientists)という中学生と高校生の発表会を見ることが出来た。彼らは全国から選ばれた生徒達で、数学、理科、技術家庭に関する発明や工夫の優秀作品約100点を工学部の教室を使って発表していた(写真3)。最優秀作品については大統領から表彰されていた。数学における計算方法の発表、太陽熱を利用した料理器や薬草からマラリアに利く薬の抽出法など生活に密着した発明や工夫が多



写真3 高校生による手作りの顕微鏡、けっこう良く見える
 く、その意欲に大変感動した。ザンビア人は温厚な反面、依頼心が強いと言われている。私はザンビア人に向上心が無いのではないかと思っていたが、この見学はそれらの偏見をぬぐい去るものであった。この意欲を持ち続けることこそ、この国の発展と幸せにつながるのではないかと思った。

6. リビングストーン

7月27日、世界3大滝のひとつ、ビクトリアの滝に行った。乾期で水が少なくて残念であっ



写真4 バオバオの木 (但しこれはロアーザンベジで撮影)



写真5 バオバオの実、種の周りの綿菓子のような果肉を食べる

たが、そのスケールには圧倒された。地名リビングストーンというのは有名なキリスト教の宣教師の名前で彼がこの地に宣教を始めたことから付けられている。滝の下流には橋がかけられており、そこにバンジージャンプの飛び込み台が設置されていたが、そこからのぞき込むだけで足がすくんだ。飛び込む料金が100ドルもかかり、何かあったら笑い者になるだけであるのでやめておいた。近くに直径6mもある大きなバオバオの樹があり、そのユーモラスな形に驚嘆した(写真4)。この樹には細長いラグビーボール大の実がなり、それを割ると種の周りに綿菓子のような果肉がついており、甘酸っぱい(写真5)。

7. 農業博覧会

8月3日、ルサカ市内の広大な展示場で農業博覧会があり見に行った。地元の産業を色々紹介しており農業のみならず工業、漁業、サービス業の展示もありザンビアの産業の様子が良く

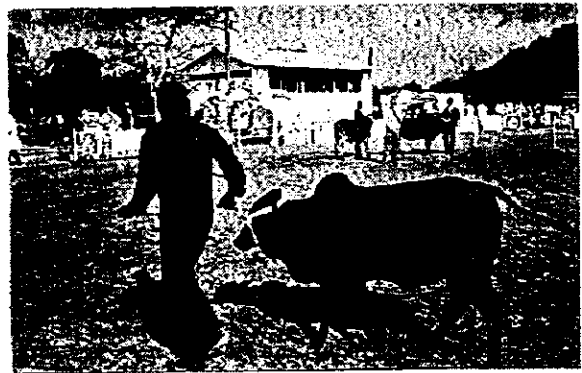


写真6 背にコブのあるアンゴニ



写真7 豆炭、七輪プロジェクトのブース

わかった。ウシの共進会もあり、背中に大きなコブのあるアンゴニ（写真6）などアフリカ在来種を沢山見ることができた。こちらの人にとっては一種のお祭りで、ボクシングや航空ショーなどもあり大変にぎわっていた。ザンビアは意外と寒く、煮炊きや暖を取るために炭を大量に消費する。当然、野山の樹が無秩序に消費されるので、日本からの援助で豆炭と七輪を普及させようとプロジェクトが組まれている。その紹介のブース（写真7）などもあり興味深かった。ちなみに関係者によると七輪と豆炭は結構評判が良いそうである。

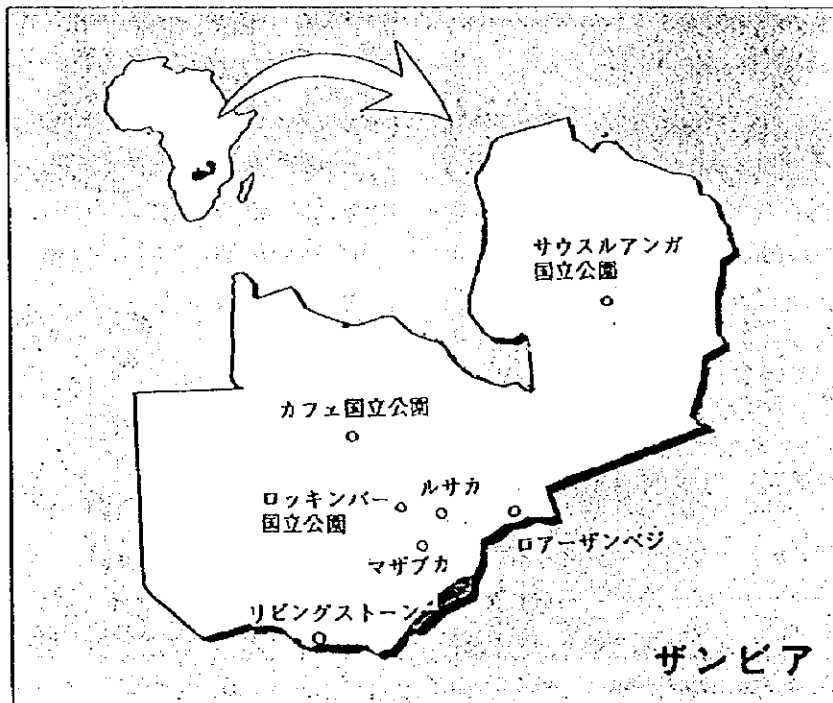
8. ロアーザンベジ

8月5～7日まで日本人の専門家とその家族十数人でロアーザンベジ国立公園にサファリをしに行った。白人が経営する川べりにあるロッジで、川ではカバが沢山気持ち良さそうに水浴したり昼寝をしたりしていて、平和そのものであった。2人ずつ常設のテントに宿泊した。朝起きてみると、あたりにライオンの足跡がありぞっとした。ジープを改造したサファリカーに乗って、双眼鏡を片手にさまざまな動物を観察



写真8 餌をあさるゾウ

した。残念ながらライオンは姿を見せなかったが、象や豹などいろんな動物を自然のまま見ることができた（写真8）。長期専門家の男性達はサファリには飽きてきているようで、釣を楽しんだ。30cmぐらいのブリムが数匹釣れたようである。一番の獲物として、何とカバが引っこ掛かってしまった。最初は正体がわからなかったので大きな魚が釣れたと思って追い掛け回したところ、急にカバが姿を現し、皆、仰天してしまった。あわててナイフで糸を切り離し、事無きを得た。下手をするとワニのいる川で船が転覆するところであった。（つづく）



資料

ジャカランダの咲くところ ザンビアの3カ月-(2)

岡田 幸助

9. 教会

8月11日、初めて念願の黒人教会の礼拝に出席することができた。教会は街の中央にある United Church of Zambia という所に行った。ルサカ市内にプロテスタントの教会はいくつもあるが、ここは英語で礼拝する唯一の所のである。その他の教会は現地語で礼拝をしていて、マクセルも現地語の教会に行っているようである。礼拝は10時から始まるがその少し前に着いた。車と人が道にあふれ、相当な人が来ているなと感じた。早速、同じ大学のテクニシャンであるムレが私を見つけて挨拶をしてくれた。今日、彼の9カ月になる長男が幼児洗礼を受けるといふ。大多数の人が正装でとびきりのおしゃれをして集まっていた。その表情も街や大学で見るのとは異なり、喜びにあふれていた。ルガサガ^カではいつも財布をしっかりと押さえて、身構えていなければならないのであるが、ここではその緊張が不要のように思えた。

出席者は600人ほどでほとんど黒人である。前の方に子供が50人ほど座っていた。白人系がばらばら、日本人は私一人であった。

オルガンの伴奏はなく手拍子を混ぜた陽気な讃美歌で礼拝が始まった。礼拝の前半に洗礼式があり、十数人の幼児と数人の子供が洗礼を受けた。その後、幼児の両親とその家族が一組ずつ前を出て、頭に水をたっぷりと注いでもらっ

た。中にはわっと泣き出す赤ちゃんもいた。洗礼が終わると、役員の人から洗礼証明書のカードをもらい、皆にこここして席に戻ってきた。

聖書朗読は小学生の男の子と女の子が行い、その後15分ぐらいの説教があり、「天地こぞりて」の頌栄で礼拝は終わった。退席は前列から整然と中央の通路を通過して、聖歌隊の讃美歌を聴きながら後ろの出口に向かった。従って600人の出席者があっても全員が牧師と挨拶をして帰れるというわけである。

10. 現地の言葉と食事

現地では英語が公用語である。部族が沢山あり、それぞれに異なる言語がある。ザンビア人は誰でも数種類の言葉が話せる。主なものはベンバ語、ニアンジャ語、トンガ語などで私が、覚えたものを以下に2・3紹介する。

ベンバ語

チスマサーナ：具合がいい

シャレニツポ：さようなら

ナットテラサーナ：ありがとう

チャブイノ：どういたしまして

マープカシャーニ：おはよう

トリピーノ：了解

ニアンジャ語

クッタクッタ：お腹がいっぱいだ

トンガ語

ウゴンベ：ウシ

マルピアブティ：こんにちは

トワリピアブティ：こんにちは（上の応え）

ガボット：元気です

これらの言葉を店で物を買ったときなど、ちょっと話すとずいぶん喜んでくれて話が弾む。

現地の人の主食はシマといって、トウモロコシの粉（ミルミル）をお湯で練ったもので、手でつまんで食べる。副食はレイブという野菜を刻んで煮たものや、小魚を食べている。バッタや芋虫、ネズミなども食べるようで、前2者は私も試してみた。特別おいしいというわけではないが、まずくもない。



写真9 現地の主食シマ（中央手前の皿）

ところで私の食事はどうしたかというと、スーパーでほとんどの食材は手に入ったので、自炊をしていた。これまで自炊生活をしたことが無かったので、料理の本を持参して肉ジャガや八宝菜など大分レパートリーが増えた。御婦人方から奥さんがいらないねといわれたが、女房はサーバントでありませんと返事した。水はそのままでは飲めない。一度煮沸して、それをコーヒーフィルターで濾過してから飲んだ。毎朝麦茶を作り、水筒に入れて1日中、持ち歩いた。ザンビアではどこでも自動販売機がおいてあるわけではないからである。これが3か月間病氣一つしなかった秘訣であったかもしれない。

11. エイズと治安

ルサカ市内のエイズウイルスの感染率は28%で、不思議なことに高学歴者ほど高い。エイズ蔓延の要因は開放的な性交渉と、私生児が差別されないという風土にあるのではないか。ザンビアでは子供を産めるということが女性の価値を決めるので未婚の母が珍しくない。女性の初産は16~18歳で、乳児死亡率が非常に高い。従って、ザンビアの平均寿命は50歳である。

ザンビア人は付き合ってみると非常に温厚で、人なつっこい。それなのになぜ治安が悪いのだろうか。これはひとえに貧困のためであろう。昔から、お金のある人がお金のない人の面倒を見るのは当たり前で、お金持ちから物を失敬するのは悪いことと思っていないようである。私は幸い、3カ月の滞在期間中なんら被害に遭わなかったが、長期専門家の方は何かしらの被害の経験がある。我々の住んでいたフラットにもこれまで何度か賊が侵入した記録がある。

ザンビアは1991年の選挙によって、30年続いた一党独裁の社会主義政権は崩壊し、複数政党主義民主運動党（MMD）が政権の座につき、市場経済制の導入、政府補助の廃止、各種規制の撤廃を積極的に進めている。政権の交代は極めて平和裏に行われ、大きな混乱はなかった。しかし、前政権時代からの多額の負債返済、不効率な政府組織体制、干ばつによるメイズ（トウモロコシ）を中心とする農業生産の減少、銅の国際価格の低迷といった諸問題により国民の不満は増大している。最近、警察機能の低下、モラルの低下が著しく治安は依然として悪い。隣国（モザンビーク、アンゴラ、南アフリカ）の内戦の終結により、不要になった武器が流入しているという。

8月15日警察がミニバスのコールボーイ（呼び込みの少年）の規制を行ったのでそれに反発したコールボーイが投石を始めた。一方、バス

会社はコールボーイを排除しないとバスを動かさないとやっている。一応、この騒動はあまり大事にならず治まったが、なぜ国が貧しく発展しないのだろうか。それはザンビア人は依存心が強く、一般に怠惰であるからかもしれない。

12. サウスルアンガにおけるカバの解剖

8月18日から23日までSouth Luangwa国立公園にカバの採材に行ってきた。参加者は門平、藤田、菱沼、森田、岡田、Zuru (講師)、Dick (運転手) の7人である。場所はルサカから車で10時間ほど東に行ったところにある象やカバ、ライオン、豹、キリン、猿などが多数生息する有名な国立公園である。私達の滞在したロッジには夜になると象やカバが窓のそばまでやって来て餌を食べていた。その地区の開発計画の一環で、増え過ぎたカバを年間500頭狩猟することが認められていて、革や食肉に利用するのが目的である。私達はその材料を無駄にしないように研究に利用させていただくというわけである。

ザンビアの国土の8%が国立公園、その周囲の20%がgame management areaで狩猟が許可されている。今回カバのcullingを行った場所は後者で、公園の入り口より30kmほど川を下ったところである。

藤田先生は肝臓に自然破壊をもたらす毒性物質の蓄積が無いが、門平先生と森田先生は血清にQ熱の抗体が無いが、菱沼先生はカバの生殖



写真10 カバの解剖、5個の頭部

機構がどのようになっているか、そして私はカバにどのような病気があるかを見るのが目的である (写真10)。

私達の滞在期間には27頭のカバが射殺され、その内私は6頭から材料を採取した。早朝の6時にジンバブエから来た白人のハンターが水面に目だけを出しているカバのその目の間を狙って撃つ。静かにしなければならないので、撃つところは残念ながら見ることが出来なかった。話によると撃たれたカバは水面下に沈み、しばらくすると浮かんでくる。他にも沢山のカバがそばにいるのだが、何事があったか気が付かないようだ。浮かんだカバをボートで引っ張り、さらにジープの綱で水際まで引き寄せる。カバは重たいので、身体の半分が水に沈んだ状態で解体をする。まず皮をはぎ、水に広げるが、厚さ5cm、6畳ぐらいの広さになる。次に脚を外し、胸腔を背中側から斧で開く。ノコ切りを使用したほうが楽に思うが、そんな道具はない。最初に肺と心臓など胸腔臓器を取り出す。そこで私がそれぞれの臓器の一部をいただくというわけである。次に腹腔が開けられ、巨大な第一胃が現れる。カバの胃は教科書によって3つとも4つとも書かれていて混乱している。私の確認したところによると、第一胃が左右に大きく2つに別れていてはっきりした隔壁が下がっている。粘膜の構造はどちらもウシの第一胃とほとんど同じである。食道が左右どちら側とつな

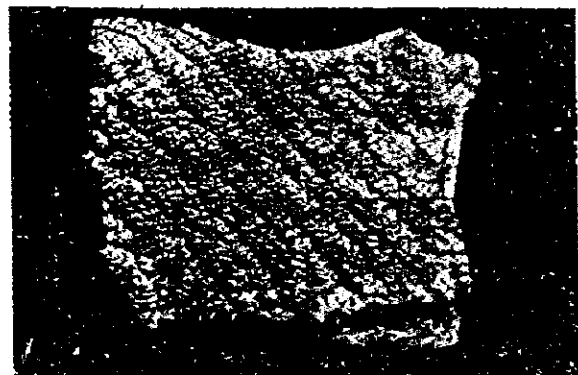


写真11 カバ第一胃粘膜、乳頭が密生する

がっているのかは確認できなかった。中央に直径60cmぐらいの第三胃があり、その粘膜もウシの第一胃粘膜とほぼ同様で、蜂巢胃や葉状胃の構造をしている胃はなかった(写真11)。従って第一胃を2つと数えるか、1つと数えるかによって、カバの胃が3つの説と4つの説が生まれたのだと思う。腺胃たる第四胃はウシのそれと同様であった。肝臓や腎臓、腸管をとりだしてほぼ筋肉だけになる。それを筋骨隆々とした黒人の解体人が斧と剥皮刀で切り分ける。肉はトラックで運ばれ、彼らが滞在しているキャンプ地で干して燻製にされ、保存、販売されるようだ。

病変としては胃潰瘍が見られた程度でその他としては寄生虫の寄生が見られた。寄生虫は専門家に回し現在同定中である。カバにはまだ知られていない新種が沢山あるそうだ。私の材料も組織検索をするとさらに面白い病変があるかもしれない。昨年も同様の採材をしているので合わせて検索の予定である。

13. 研究活動

3カ月の滞在期間中病理学研究室に20例の解剖と22件の一部組織の検定依頼があった。日本ではあまり見られない病気や、日本でも病気は存在するものの典型的な病変が見られない症例がザンビアには多く大変勉強になった。前者としては狂犬病、イヌの銅中毒症、食道虫症が、後者としては羊の真菌性胃炎、ガンボ口病、ニューカッスル病などを経験した。またカバのcullingに参加し、6頭のカバを解剖し、胃潰瘍と寄生虫症を観察した。期間内に研究を完結させることが出来なかったが、以後長期専門家の松川先生やカウンターパートのバイアットに引き継ぎ、今後連絡をとりながらまとめていきたい。

研究・教育機器は時として日本の大学より上等なものが納められている。しかし残念ながら機能していない場合が多い。それはそれらの機

器が外国から棚ぼた式に与えられたものであるから、その有り難さを充分認識できず、取扱いが乱暴で粗末になる。故障してもすぐに修理出来なかったり、しない。一方機器にはそれらを動かすための消耗品や試薬が必要な場合が多いが、その補給が間に合わなかったり、予備に購入しておいたものの使用期限が切れてしまう、などの理由によるのだろう。やはり自分自身で努力して勝ちえたものしか身に付かない。援助の仕方に工夫が必要である。

14. 学部学生の教育

「病理学教室の皆さんお元気ですか。帯広の獣医学会御苦勞様でした。帰国日がカウントダウンされるようになり、正直言ってももう少しザンビアにいたいと思う気持ちも半分あります。先日、酪農学園の森田先生が骨折で帰国され、北大の藤田先生も急用が出来て帰国されたので、残りは私と北大の菱沼先生、日大の鯉江先生の3人になりました。短期専門家の平均年齢が少し若返り、皆、元気いっぱいです。

こちらはあいかわらず晴れの日ばかりですが、気温はだんだん上昇しております。現在、25度前後でしょうか。ジャカラングという高さ10mもありそうな大きな木が街のあちこちにあるのですが、それが一斉に藤色の美しい花を咲かし出しました(写真12)。日本の桜のように葉はまだ出ていなくて、花だけを木の一面に付けるのでとても見事です。一つ一つの花は大きさ3



写真12 ジャカラングの木、うす紫の花が満開

cmぐらいのラッパのような形をしていて椿のようにばらばらと落ちてきます。雨が一滴も降っていないのに、春は確実にやって来て、落葉した木に新芽が出て来るのは不思議です。

太陽が東から出て西に落ちるのは日本と同じですが、ここは南半球ですから、太陽が日中北側にあることに最近、気付きました。ルサカは空気が汚れているので、余り星が見えませんが、先日行ったサウスルアンガなどでは素晴らしい星空が見え、天の川が粉のような細かい星から出来ているのが良くわかりました。もちろん南十字星も良く見えますし、またこんな時期にオリオン座が真上にきています。

7月26日と28日、4年生の学生に病理各論の造血器のところの講義と実習(写真13)を2日



写真13 組織実習風景、日本から援助のオリンパス顕微鏡

間に渡って行いました。御存知のように岩手大学では大島先生がこの個所の講義をなさいますから、私としては初めてのところであり、それを英語でしなければならず準備が大変でした。学生は25名、内女子が3名です。ちなみに黒人は大変目が良く、眼鏡をかけた学生は3名だけでした。また早くませる様で、日本人の学生よりもなぜか大人びて見えます。最初はおっかなびっくりでしたが、だんだん慣れてくると、気質は皆さんと同じだということがわかり、授業をいつものようにやりました。大変熱心に聞いてくれ、講義にも熱が入りました。ここの学生は超エリートの様で、大変頭が良く、ポイント

をついた質問を沢山してくれました。私が質問を聞き取れなかったとき、バイアットが通訳をしてくれて大変助かりました。こちらの学生は暗記するよりも、良く考える訓練が出来ているように思いました。教科書は買うお金がないので、誰も持っておらず、先生の言うことを1字1句聞き漏らさないようにしっかりとノートを取っています。これから試験問題を作らなければならないのですが、その問題を他大学の先生が問題として適当かどうか審査して、それから試験に使用されるのだそうです。従ってうっかりした問題も作られず、これも頭の痛い所です。採点が不満の場合、裁判に訴えるという学生もいるそうです。(8月9日記)

15. 大学院学生教育

9月10日(火)にマスターコースの講義を依頼され、Handout(プリント)やスライドのリストも作成し、張り切って準備をした。午前中には私のライフワークの1つマレック病について、午後にはもう1つのウシ白血病について講義する予定であった。当日教室に行ってみると学生が来ない。どこを探してもいない。後で分かったことであるが、この日はもともと授業のない日で全員、寄生虫の採取に学外に出ていったようである。誰が大学院の講義の世話をするのであろうか。たまたまその当日開かれた専門家会議で尋ねてみたが、直接学生を捕まえて連絡するしかないのだという。学生がどこにいるか、短期専門家である私には分かりようもない。日本のように学生は教室に所属していない。連絡用の掲示板もない。会議の席上、多田チームリーダーはJICAの予算で掲示板の設置を提案した。しかしそれは大学(大学院)がすべきことではないかと思った。結局、木曜日に講義をすることになっていたDr. Musondaにその時間をもらって、12日(木)に行った。

来年の7月で現在のプロジェクトは終了する。

私は大学院の充実こそ今後課せられた課題ではないだろうかと思う。大学院が充実すれば当然研究活動も活発になるであろうし、後継者の問題も解決するであろう。私は短期専門家であるため今までのいきさつや、詳しい事情は知らないが、学生を教室へ配属してはいかがであろうか。専用の講義室もない。本学における大学院の位置づけが整備されていないところに問題があると思う。

後日、一人の大学院生が研究室を訪ねてきて、講義した所の別刷りを、図書館では入手困難なので、もらいたいと言ってきた。あいにく、今回持参しなかったので、帰国後送付すること約束した。大学院生にはあまりよい印象を持たなかったもので、大変うれしいことであった。

16. ロッキンバー国立公園

9月8日にロッキンバー国立公園に短期専門家の3人(岡田, 菱沼, 鯉江)と北大の獣医学部1年生の2人(寺岡, 小川)で運転手つきレンタカーに乗って行った。

ここはカフェ川流域湿地帯で湖のように広く、向こう岸は見えない。鳥の多いことが有名でホワイトベリカン、マラブーストック、ワットルドクレーンなどを見ることが出来た。

普通は誰も行かない漁村のあるほうに行ってみると、そこは果てしなく広がる湿地帯で、木も岩も何もない。何の目的か枯れた草に火を着けて草を焼いていた。焼けたところは真っ黒になり、煙りでくすぶっていた。そこから虫が飛び出すと見えて、焼けた領域の辺縁に大型の鳥が待機していた。漁師の家が数十軒あり、それらは家というよりもかやぶきの小屋で、屋根に魚の干きが干してあった。視界をさえぎるものは何もなくて360度どちらを向いても地平線で、まっ平の皿の中心にいるようであった。地平線には竜巻がいくつか見えた。地平線に木や森の影が浮かんでいて、それを双眼鏡で良く見ると、

それが蟹気楼であることに気がついたときには感激した。ブルーワイドビースト、グレータークウドゥー、カフェレーチュエ、オリビなど地平線に無数(数千)の動物が見えた。

17. カフェ国立公園

9月13日(金)カフェ国立公園の北の端にあるLungaロッジへ短期専門家の3人で小型飛行機をチャーターして行った。この国立公園は四国の面積程もあり、とてつもなく広い。到着後、午後からBusanga Swampへサファリカーで行き、そこに常設してある小屋で1泊した。翌朝、ライオンの多数生息する平原へでかけた。そこには5~6頭のライオンがいて、そのうち1頭が今捕まえたばかりのレーチュエ(鹿のような動物)を頬張っていた。遠巻きにハイエナや秃げ鷹がライオンの食事の済むのを我慢強く待っていた。別の2頭が交尾を楽しんでいた。雄が雌の上のにり雌の項に噛みつき、ことを済ませると、さっさと雄は雌から下りた。すると雌はさも気持ちよさそうにごろりと一回転寝返った。その動作を飽きもせず、10分毎に何度も繰り返していた。(ということは私達も飽きもせず長時間観察していたことになるが)。

18. マザブカ訪問と青年海外協力隊員の活動視察

帰国間際の9月21日に私と菱沼先生の2人でマザブカを訪問した。マザブカはルサカの西100kmのところ、ここには私のカウンターパートであるバイアットの実家があり、彼が案内してくれた。マザブカではサトウキビや綿の栽培が行なわれ、木も多く緑豊である。彼の一族はインドから第2次世界対戦後この地に移り住み、商売で成功し、大きな家に住んでいた。彼らは熱心なイスラム教信者でその生活を見ることが出来た。(写真14, 15)

正午すぎにバイアット宅に到着し、ただちにマザブカで活動している女性で酪農学園大学卒

業の上手麻路隊員を訪問した。街から少しはなれた寂しい1軒屋に彼女は一人で住んでいた。彼女は牛のタイレリア症の発生している農家へちよと往診へいくところなので、付いていくことにした。以前この地にプロジェクトが行われていた頃は牛に薬浴をさせていたが、プロジェクトが終了した現在は資金がなく薬浴させることができないのだという。また治療に回るにも車がなく大変苦勞している様子が良く分かった。彼女は泥棒に遭ったり、大きな病気になったりしているが、それらに負けることなく非常に明るく頑張っていた。大学に高額な資材を投入するよりも、このような現場で頑張っている隊員に車を1台貸与するほうがよほどの本当の効果が現れるのではないかと思った。



写真14 巨大なアリ塚 (マザブカ)



写真15 マザブカにあるイスラム教のモスク

19. セミナー

9月18日(水) 4時から1時間の公開のセミナーを行った。大学のスタッフや学生と接触する最後の機会となるので十分な準備をして臨ん

だ。聴衆は40人程度であったろうか。我が研究室のDr. Mwaseが司会をしてくれた。今回ザンビアに来れたことへの感謝の後、「反芻獣免疫担当細胞の病理形態学；ウシ白血病の病理発生と予防」について講演した。ウシ白血病の紹介、反芻獣の免疫担当細胞の説明、ウシ白血病におけるリンパ球の種類、病理発生をふまえた予防法について講演し、最後にこの大学の発展と共同研究の推進を願って講演を締めくくった。質問としてはこのウイルスは人間に感染しないのか、ザンビアにこの病気は有るのか、なぜ感染牛のうち発症するものが少ないのか、何が発症の要因かなどについて質問があった。私の語学力の不足で充分意図が通じなかった恐れがあるが、一応皆に興味をもって聞いてもらったのではないかと感じている。

20. おわりに

カウンターパートのはバイアットは北海道大学で博士号を取得してきた人物で将来のこの大学を背負っていく人物の一人になるであろうと思われる。従って彼は既に高度な知識と技術を有しており、あまり教えることもなく、かえって私の方が教えられることの方が多かった。今回、輸送機材として各種病原体に対する抗体、染色試薬および機材を持参したので、今後、彼がそれらを用いて各種感染症の診断に活用してくれることであろう。これを機会に日本と共同でザンビアに存在する各種の病気について研究することは両国にとって有益である。私はあまりお役に立てなかったかもしれないが、今後この大学がますます発展することを希望する。

最後に、今回の派遣に際し大変お世話になった、国内委員会、JICA関係者、ザンビア大学のスタッフ、長期ならびに短期専門家および留守を守ってくれた教室員に心から感謝の意を表す。

ザンビア通信 I

鯉江 洋 Hiroshi Kote

日本大学生物資源科学部獣医学科アニマルメディカルセンター
(〒252 藤沢市亀井野 1886)



フラットのお手伝いさんたち

この連載は、国際協力事業団(JICA)によるザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトの短期専門家として、著者が1996年8月～10月にザンビアに渡っていたとき、インターネットを通じて日本に宛てて送ったメールがもとになっています。

皆様おげんきですか。

ホテル住まいからやっと UNZA (the university of zambia) フラット住まいになりました。まだ着いてから5日しか経っていないのでよくはわかりませんが、治安はかなり悪いようです。フラットのまわりは高い壁で囲まれ、緊急連絡でセキュリティーがやってくる仕組みになっています。もちろん24時間体制で門番がいます。

着いて3日目に、コンパウンドとっていわゆる低所得層の人たちの住む町で日本祭りをやるというので、橋本先生(日本大学卒業で山根義久先生のところで代診をしていた私の先輩です)につれていってもらったのですが、そのようなところでやっているとは知らず、本当にビックリしました。子どもたちが異常に多く、服はボロボロで、靴を履いていない子がほとんどでした。青年海外協力隊の若者たちが餅つきをしていたのですが、そのまわりを子ども



大学付近の民家にて。子供たちと



学内で大学のスタッフといっしょに

ちが囲み早く餅を配らないかな、と待っているようでした。また、私たちの周りも子どもたちで囲まれ、ちょっとした芸能人のようでした。近くに市が立っており、それをのぞきましたが、またもやビックリ、なんとゆで乾燥したネズミが売られていました。それにはハエがたくさん集っていましたが、大切な蛋白源となるそうです。でも子どもたちはとても無邪気そうで、最後にバイバイと手をふって車を追いかけるしぐさはとてもかわいかったです。こんなに子どもが多くても成人する子は少ないようです。

物価はほぼ日本と同じです(外国人用スーパー)。野菜、肉は少し安いのですが、他は同じくらいです。衣類、靴類はまだまだ手に入りにくそうです。いままで私の行った国の中では、米国が物が豊富でしかも値段が安く、生活するにはいいところかもしれません。道路は舗装されていますがガタガタです。歩道は舗装されてなく雨が降ったときのために溝が掘っています。日本の古墳時代の道跡がよく溝が発掘されますが、まさにそのようなもので、ただ掘ってあるだけです。雨期にしか降らないのでそれで充分なのでしょう。しかし、ホテルやスーパー、ピザ屋などしかまだ行っていませんが、その辺りの環境は私が思っていたものより断然日本に近いような気がします。

またお便りします。

(1996年8月27日)

J V M Vol.50 No.6,1997

ザンビア通信 2



鯉江 洋 Hiroshi Koié

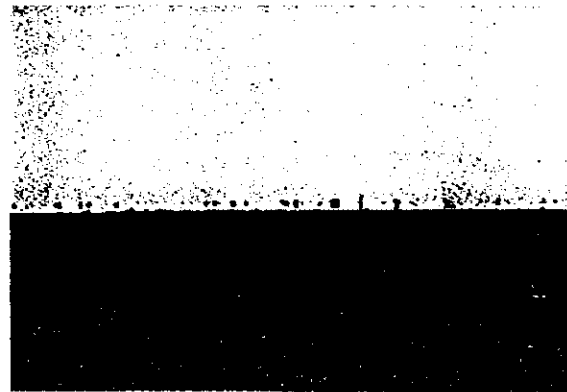
日本大学生物資源科学部獣医学科アニマルメディカルセンター
(〒252 藤沢市亀井野 1886)

この連載は、国際協力事業団(JICA)によるザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトの短期専門家として、著者が1996年8月～10月にザンビアに渡っていたとき、インターネットを通じて日本に宛てて送ったメールがもとになっています。

9月8日(日)、初めて野生動物を見ました。Lochinvar National Park といって、私たちのいる首都ルサカから車で往ける一番近い国立公園です。といっても片道3時間でそのうち舗装されているのは1時間半で、公園内に入っても舗装されている道などなく、食事をしたとき以外はほとんど車の中にいました。

見た動物はインバラ、レイチェ(シカと牛の混ざったような動物)、名前は知りませんがペリカンみたいなとてもでっかい鳥、キツツキ、サルくらいでしょうか。あまり動物の種類は見れませんが、レイチェの数の多さにビックリしました。1,000頭近くいたのでしょうか、見渡す限り180度くらいの視野で広がって、遠くの方からこちらをうかがっていました。それと景色がすばらしかったです。見渡す限りの草原、遠くには曇気楼が見え、竜巻があちこちに起こっていました。しかし往復6時間、公園内4時間の車の移動はかなりハードです。おじいさんになってからはいけないかもしれません。皆様もお若いうちにどうぞ。

不思議に思ったのは、なんにもない水辺の草原の中に突然、集落があったりして(漁師だそうです)、その人たちは日本の縄文時代みたいな生活をして、本当に電気もなく小屋はワラを合わせたような作りになっているのです。訊いてみたところ彼らにも選挙権がちゃんとあって今度の選挙にも投票するそうです。票はヘリコプターを使って運ぶそうです。しかし、なんにもない



草原の中をボロボロの自転車もしくは徒歩で移動している人に出会うと、自分の日本での生活はなんなんだろうと考えてしまいます。たぶん彼らは隣の集落に移動するのにもほぼ1日かけて、もしくは途中で野宿をしていくのでしょうか。生きるってすごいことだと思いませんか。日常の細かいことなんてどうでもいいと思いませんか。このアフリカの大地からはそんなことを教えてもらったような気がします。

こちらの学生の話題をしましょう。私が受け持っているのは5年生の臨床生化学という授業で、学習到達度は日大の学生ぐらいだと思います。日本のシステムに基づいているためこちらでも6年制です。2年までNatural Scienceで一般教養を学び、その後成績と本人の希望に基づいてそれぞれの学部に進学します。ザンビア大学自体が日本で言ったら東京大学のような存在ですから、獣医はとっても優秀な学生が来ています。そんな彼らに授業をやっているのですから信じられません。

授業は1時間60分ですが、私はそれよりはやく終わることがほとんどです。そのためか学生の受けはいいようです。学生ははじめなものればほとんど授業にもでてこないものもいますし、出席をとったかどうかわからなかったか訊いてくる学生もいて、なんだかどこの大学の学生と変わらないなあと感じています。5年生はたったの14名で実習はとてもやりやすいです。ザンビア人の特徴で彼らも時間どおりに来ることはありません。草原を歩いて移動することを考えたらそれも分かるような気がします。こんな生活習慣に慣れつつある私は日本で社会復帰ができるでしょうか。それではまた。
(1996年9月10日)

ザンビア通信 3

鯉江 洋 Hiroshi Koie

日本大学生物資源科学部獣医学科アニマルメディカルセンター
(〒252 藤沢市亀井野 1886)



この連載は、国際協力事業団(JICA)によるザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトの短期専門家として、著者が1996年8月～10月にザンビアに渡っていたとき、インターネットを通じて日本に宛てて送ったメールがもとになっています。

9月の21日(土)から24日(火)まで South luangwa national park に行ってきました。ここはザンビアで最も野生動物が豊富で、観光客が集まる場所です。今回は獣医師で長期専門家の橋本久典先生一家とご一緒させていただきました。小学校5年生の佑一君と4年生の洋美ちゃんとも一緒でしたが、この年頃にしては聞き分けのよい子たちでめずらしく子どもがかわいいと思ってしまうました。

ところで South luangwa の動物は豊富でした。キリン、ゾウの群、ヒョウ、インパラ、kudu、ウォーターバック、シマウマ、Puku、バッファロー、マングース、カバ、綺麗な鳥(Bee eater)の群など見ました。残念ながらライオンは4日間のうちに見ることはできませんでした。最後の方は案内人もかなり焦っているようでしたが、そこはやはりザンビア人で「今度来るときはライオンみれるよ」と別れ際に言っていました(こんどはいつになるんだろうか?)。ザンビアでのゲームドライブ(サファリに行くこと)は一般的に朝5時半起床、クッキー・お茶を飲んで6時ころに出発し、9時に宿に帰って食事。昼間は暑いのでキャビンの中で寝たり、外でプールに入ったり日光浴をしたりぶらぶら過ごすのですが、4時頃また出かけます。そのまま夜まで帰ってこないときもあれば夕食後ナイトサファリに行く場合もあります。ケニアでは夜のサファリは禁止されているようですが、ザンビアはOKです。橋本先生たちはケニアで、あの有名なマサイマラのサファリを経験しているのですが、そちらは世界的に有名になりすぎて完全に観光化されているとのこと。マサイマ

ラ公園内は車がどンドン奥まで入っていくのでワグチだらけで、それに比べるとこの国のサファリは無理に動物を追いかけられることもなく偶然道ばたにでてきたのを見るところというものでとても素朴だそうです。

今回泊まった宿は Mike Faddy という人の経営する Cinzombow というロッジでした。ここは Luangwa 河沿いにあり、昼夜ともカバの群が「フンゴ、プヒー、プヒー」とうるさく鳴いており、近くにはクロコダイルが甲羅(?)干しをしているのを見ながらのんびりとプールに入ったり、木陰で読書(子どもに借りたマンガ)をしていました。こういうことばかり書くと遊んでばかりいるように思われてしまいますが、授業のことで悩んで(たぶん食べ過ぎではない)胃が痛くなって食事ができなくなったり、寝不足になったりしているのです。そのことを考慮に入れていつも読んでください。

そんな中、授業にも慣れた私は、試料を集めようと思い検便道具を持参してきました。案内人に「ライオン、ヒョウ、ハイエナなどの便を探りたい」とたずねましたところ、「国立公園内は糞も持って行ってはダメ」と言われてしまいました。しかたがないので宿のまわり(昼間でもブッシュの中は入るなど言われ、また真夜中にゾウの群がキャビンのすぐ側までやってきたほど自然の中にあるのですが、私はなんと熟睡していました。)目を皿のようにして、やっとヒヒとゾウの「それ」を集めてきました。もし肉食獣の試料を採取するのであればもっと本格的に準備をしなくてはならないようです。

今回も長くなってしまいました。一番印象深かったのはサファリカーに乗ってアフリカの大地の風を受けながら走る気持ちよさです。それに乗りながら道行く人に手を振ったり、遠くを歩いているゾウやキリンを眺めるのは最高の気分です。それではまた。
(1996年9月25日)

いつもキリンはこちらを遠くから観察しています。



朝日にうつるアフリカゾウ

ザンビア通信 4

鯉江 洋 Hiroshi Koie

日本大学生物資源科学部獣医学科アニマルメディカルセンター
(〒252 藤沢市亀井野1886)



この連載は、国際協力事業団(JICA)によるザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトの短期専門家として、著者が1996年8月～10月にザンビアに渡っていたとき、インターネットを通じて日本に宛てて送ったメールがもとになっています。

先日、授業中に小テストを実施しました。さすがにテストになると出席率は100%になり、いままで授業に出ていなかった学生がプリント(言葉が充分でないのでテキストを毎回作っている)をくれと毎日のようにやってくるようになりました。こういうことは万国共通です。やはりかれらはエリートで、結果は私が思っているよりもかなりいい線いっています。反対に考えさせられる解答もあつたりして自分自身も勉強になりました。また、先週は期末試験の作成もしたので体調が悪かったのにつこう忙しい週でした。この期末試験作成の締め切りが9月5日だったらしいのですが、私に言ってきたのがなんと10月1日で「締め切り日がすぎているから明日まで提出してくれ」だって。さんざん自分の言い忘れて遅れていたのにザンビアらしいでしょう。もうこんなことには驚かなくなっていました。

私はこういう授業の他に「臨床生化学実験室の運営の円滑化」という使命もあり、短期専門家にはいろいろなテーマがあるのです。この実験室は要するに病院や外の開業医からの検体を測定するサービスが目的なのですが、その現状は私の常識を超えて驚きました。何が悪かったのでしょうか。私が思うにザンビアの現状をよく考えずに機器を導入したのが原因だったのではないかと思います。こんな書き方をすると理解しにくいと思いますが、この実験室にはラバスーパーというすでに日本では使われなくなりましたが一応簡単に肝機能、腎機能が測れる機械もありますし、Na、K測定機、分光高度計、蛋白分画も測れます。なにが問題かといいますが、それらの機械に必要な試薬(キット)がこの国では根本的に高価で入手が困難なのです。それからあまりに便利にできている機械は壊れたら二度と直りません。メンテナンスをする能力が全くないのです。したがってすでに試薬(キット)入手待ち、修理不可能で眠っている機械が

なり存在します。でも、来年の7月でザンビア大学を支援するプロジェクトは終了予定で、それ以降はたぶん彼らにはキット化された試薬は購入できないでしょう。そこで橋本長期専門家と私の二人でキットを使わない本当の試薬から分光高度計を使った原始的な(日本だったら40年くらい前のこと)方法で検査ができるように努力している最中です。あと3週間ぐらいいかありませんがけっこう苦勞しています。プラスコ、ピーカーを使ってるまで高校の時の化学の実験をやっているようです。日本は本当に便利すぎます。

それから日本人だけで行ってしまうと全く意味がありませんのでザンビア人スタッフといっしょに行っているのですが、これにはかなり忍耐が必要です。かれらのペースは私たち日本人とはあまりにもかけ離れているからで、民族の違いを肌で感じています。本当に日本人というのは仕事が好きとか、なにかしていないと気が済まない性格の人が多いのです。こちらの人は仕事が暇だと判ると1日中でも話を続けています(もちろん例外はいます)。偉そうな言い方ですがザンビア大学だけでなくこの国の獣医学がつぶれないように努力しているつもりなのですが、実験室の掃除から試薬作成もこちらが動き出してどうにか始まるといった具合で、ちょっと援助慣れしすぎている感があります。本当に民族の常識だけが違うということは判っているのですが仕事の途中で「時間だからお先に」ということもしばしばです。他ではほとんどストレスは感じませんが、こういうことでのストレスはだいぶあります。でもこのようなことは長い人類の歴史でできた民族の違いから起こることなので「そういうものなのだ」と思うしかないのです。この大学は日本で博士号を取った教員がほらほら掃ってきているのですが、彼らは本当にきびきび動いていて気持ちがいいです。日本に5年もいると行動が日本人化してしまうのです。いずれにしてもここは彼らの国ですから彼らにあわせるしかないのです。

ちょっと今回はまじめすぎましたね。それではまた。

(1996年10月7日)



ザンビア通信 5

鯉江 洋 *Hiroshi KOIE*

日本大学生物資源科学部獣医学科アニマルメディカルセンター
(〒252 藤沢市亀井野 1866)



この連載は、国際協力事業団(JICA)によるザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトの短期専門家として、著者が1996年8月～10月にザンビアに渡っていたとき、インターネットを通じて日本に宛てて送ったメールがもとになっています。

いよいよ帰国となりました。アツという間の3か月でした。最後の1週間は授業から解放され、10月24日の独立記念日を挟んで2泊3日でLower Zanbezi National Parkへ行ってきました。総勢11人という大所帯で、目的は釣りでした。3組の家族連れが参加し、子供が4人でそれはもうにぎやかでちょっと疲れました。

釣りの目的はタイガーフィッシュで、口が大きくワニのような鋭い歯が生えていて一見すると、とても怖ろしい魚です。Royal Zanbezi Lodge というところに泊まったのですがチルバ大統領も来たことがある由緒正しいところです。釣果は、今回釣りが初めてという三井商事の方が5.5kgの大物を釣り上げました。私はというと、坊主でした。今回、同行の一人がカバに釣り針を引っかけるという緊張的一幕がありました。というのもカバはボートをひっくり返すことがあり、しかもボートのまわりはワニだらけだったからです。

3日間の釣り三昧の合間に、1回だけゲームドライブ(車に乗って動物を見ること)に行きました。1歳くらいの若いライオン3頭がバッファローの子供を食べているところを見ることができ、しかもまわりにはハイエナが10頭以上群がり、隙をうかがってライオンと睨み合いをしているという緊迫した場面でした。サファリ用の車は屋根がないものがほとんどで、声をあげると襲われてしまうこともあり、息を殺して見ていました。

このロッジはザンベジ河をモーターボートで1時間半ほど下ったところにあり、水辺でたわむれるゾウやカバの群を横目



で見ながらの川下りはとても気持ちがいいものです。また、明け方には私の寝ていたロッジのすぐ近く5mくらいまでカバがよってきて芝生をバリバリと牛のように食べているのを見ることができました。通常、カバは恐がりて陸上ではなかなか見れないものです。魚は釣ることはできませんでしたが、それなりに楽しい旅行でした。

旅行から帰ってきたその夜には橋本先生が自宅で大学のスタッフを呼んでお別れパーティーを開いてくれました。久しぶりに食べる美味しいお好み焼きに涙が出ました。その後大学のスタッフと「踊りに行こう」ということになり、Black Velvet というルサカでも一番流行っている場所に移動しました。店内はなるほど私が若かりし頃の歌舞伎町のディスコとほとんど同じ雰囲気でした。金曜日の9時半過ぎでは、まだ客はバラバラ。11時くらいになって混みだしてきました。こんなところもスロースターターです。

29日にルサカを立ちますが、これでザンビア通信を送るのは最後でしょう。皆さん楽しんでいただけましたか。書ききれないこともいっぱいあります。いまはここを離れたい心境になっています。それは短期なので本当にこの良いところしか見えず、仕事や生活する上で大変なことを経験していないからだと思えます。仕事をする環境なんてたぶん世界中どこに行っても同じような気がします。なんといっても同じ人間同士で生活しあっているのですから。この生活習慣やものの考え方ははっきり言って日本とかなり違いますが、人間としての喜怒哀楽は同じでした。そういう感情はどこ行っても同じなんです。それではみなさまに会えることを楽しみにして終わろうと思います。ありがとうございました。(1996年10月27日)

(おわり)



舗装されていないのでパンクは日常のことです。